電子出版の展望

～利用者・作成者・出版社・中間業者の立場から考える～

山田正雄ゼミナール　12期生
魚井彩賀・大平智治・小松崎舞・
高木友子・渡邊俊之

はじめに

2012年現在、電子書籍が多く売り出される時代となり、同時に電子書籍専用端末の販売も活発化している。

電子書籍という言葉を耳にする機会が増え、徐々に電子書籍市場が拡大していると感じられる一方、電子書籍市場の拡大を妨げている問題も表面化してきている。

電子書籍市場はまだ未熟な市場であり、市場開拓も容易ではない。このような中で、利用者・作成者・出版社・中間業者の４つの立場では、アナログの書籍市場にはない影響が出てきている。

本研究では、これら４つの立場から電子出版の展望を考えていく。

目次

１．電子出版の概念
1-1.電子出版とは
1-2.電子書籍の登場背景
1-3.電子書籍の市場規模

２．電子書籍の仕組み・種類
2-1.仕組み
2-2.電子書籍端末の種類
2-3.電子書籍の種類

３．電子出版のメリット・デメリット
3-1.利用者側からみた電子出版のメリット・デメリット
3-2.作成者側からみた電子出版のメリット・デメリット
3-3.出版社からみた電子出版のメリット・デメリット
3-4.中間業者側からみた電子出版のメリット・デメリット

４．電子出版による中間業者への影響
4-1.印刷業界への影響
4-2.取次会社への影響
4-3.書店への影響

５．電子出版の課題
5-1.権利処理問題
5-2.フォーマット問題
5-3.電子書籍の価格・販売の問題

６．電子出版の展望

７．参考文献

1．電子出版の概念

1-1.電子出版とは

電子出版は技術の進歩、社会とのかかわりにおいて発展途中のメディアであるため概念が定着していない。内容、範囲、立場、分野において異なることが多い。

定義①新小辞林　三省堂編修所編著　1982年
第３版（特装版）三省堂発行より

印刷や流通に手間をかけずデジタルデータ化された文書の情報をインターネット上や専用機器などで販売・頒布すること。対象は新聞や雑誌・書籍・漫画など種類は多数にわたる。

定義②日本電子出版協会による定義

文字情報、映像情報などをデジタル化し、ランダムアクセスが可能なデータベースを設け、構築し編集ソフトウェアにより、創造的著作物として編集、電子媒体により出版するものを電子出版とする。

定義③小町祐史の定義

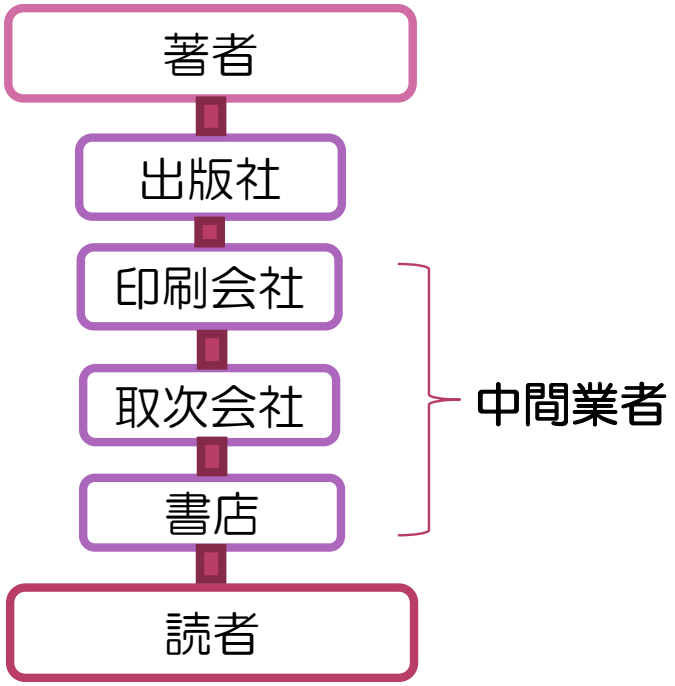
※小町祐史･･･情報処理学会情報規格調査会
SC34専門委員会委員長。

出版に必要なプロセスを電子化したシステムを電子出版システムと呼び、それを用いた出版を電子出版という。

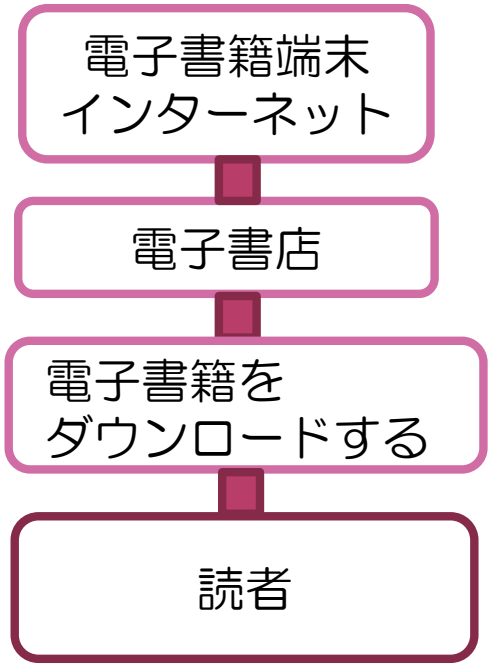
電子出版とは

作成者が取次会社、印刷会社、従来の書店などのいわゆる中間業者の手間をかけずに、デジタルデータ化された文章の情報をインターネット上や電子書籍端末で販売すること。

従来の出版の仕組み

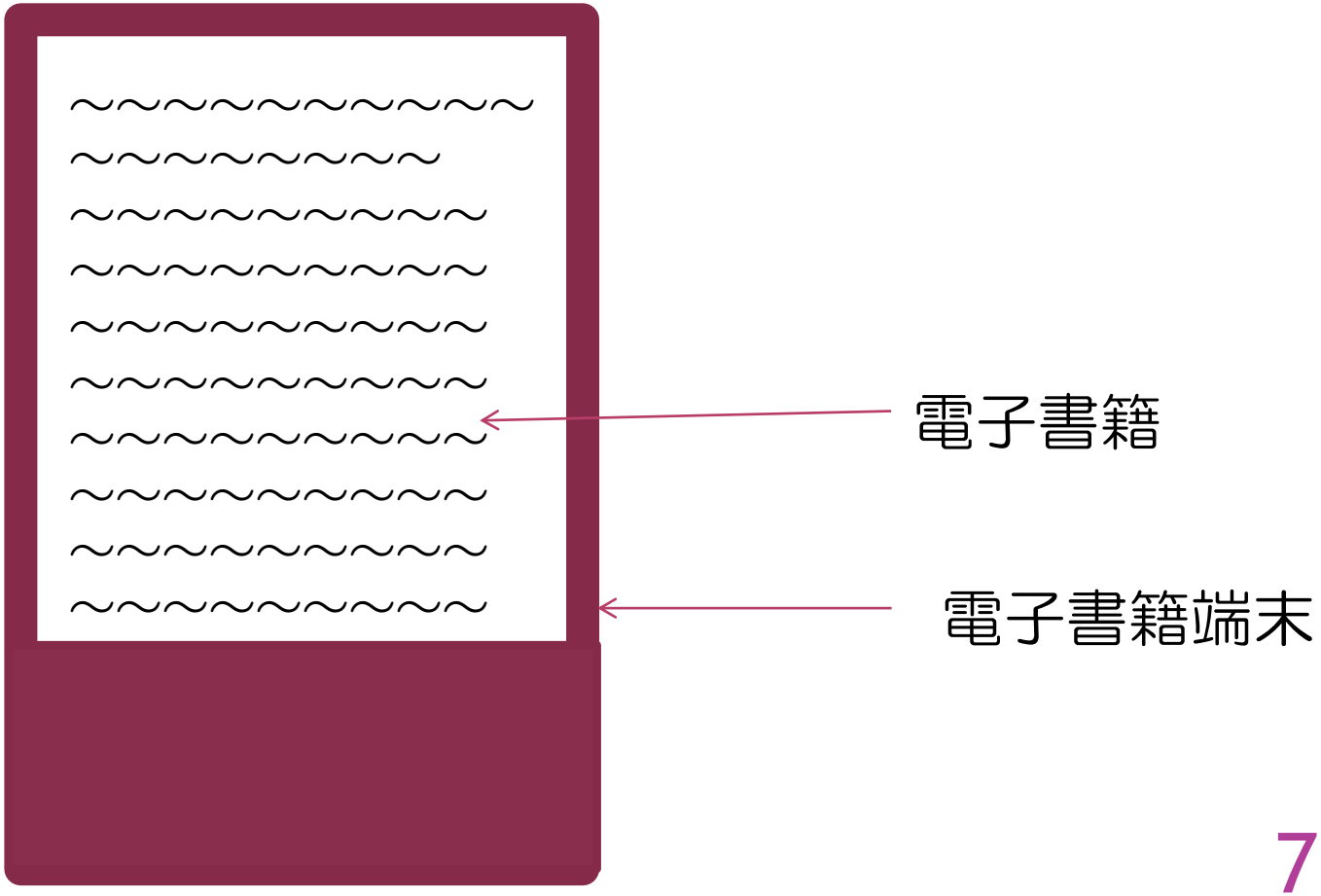


電子出版の仕組み



電子書籍とは

電子書籍とは、古くから存在する紙とインクを利用した印刷物ではなく、電子機器のディスプレイで読むことができる電子的出版物である。



1-2.電子書籍の歴史

1960年代　アメリカにおいて学物情報分野で出版物の電子化が始まる。

1990年　ソニー、CD-ROMを利用した「データディスクマン」を発売
日本での書籍の電子化の先駆けとなる。

(出典:ソニー株式会社HP)

1998年　「電子書籍コンソーシアム」登場
1990年代後半　インターネットの普及。パソコンや携帯電話で電子書籍が読めるようになった。

2007年　アメリカamazonで電子書籍専用端末Kindleが販売開始→**電子書籍普及の基盤。**

2009年　日本でもKindleDXが購入できるようになる。
2010年　iPad発売。**電子書籍元年**といわれる。
2012年　楽天よりKobo Touchが発売。
Google社よりNexus7が発売。

電子書籍元年とは

2010年は、日本において電子書籍市場が活発化し始めた年。

≪利用可能になった端末≫

- スマートフォン

(出典:Apple.comサイト)

- iPad

(出典:Apple.comサイト)

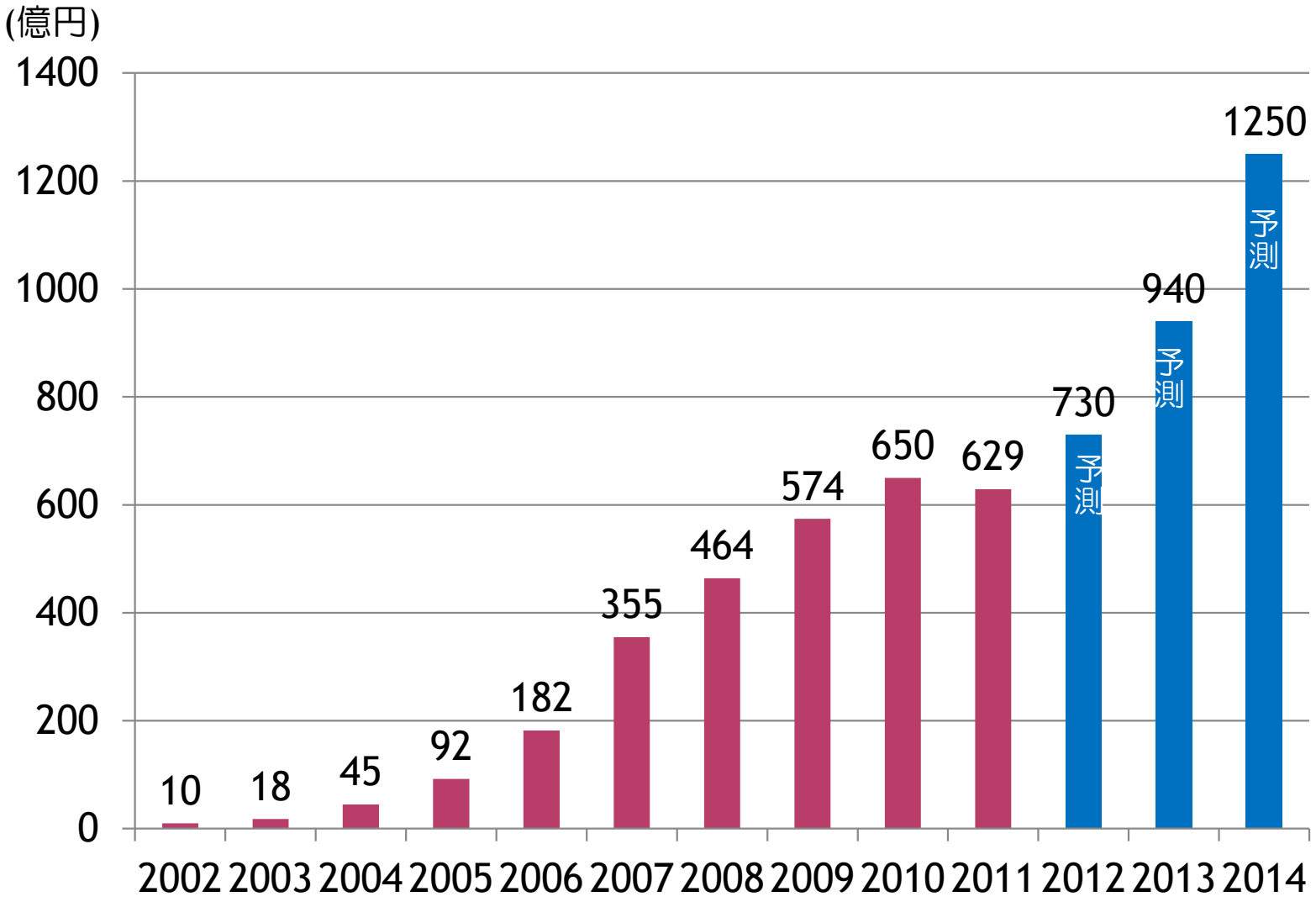
- Sony Reader

(出典:ソニー株式会社HP)

- GALAPAGOS

(出典:Google Pad)

1-3.電子書籍の市場規模

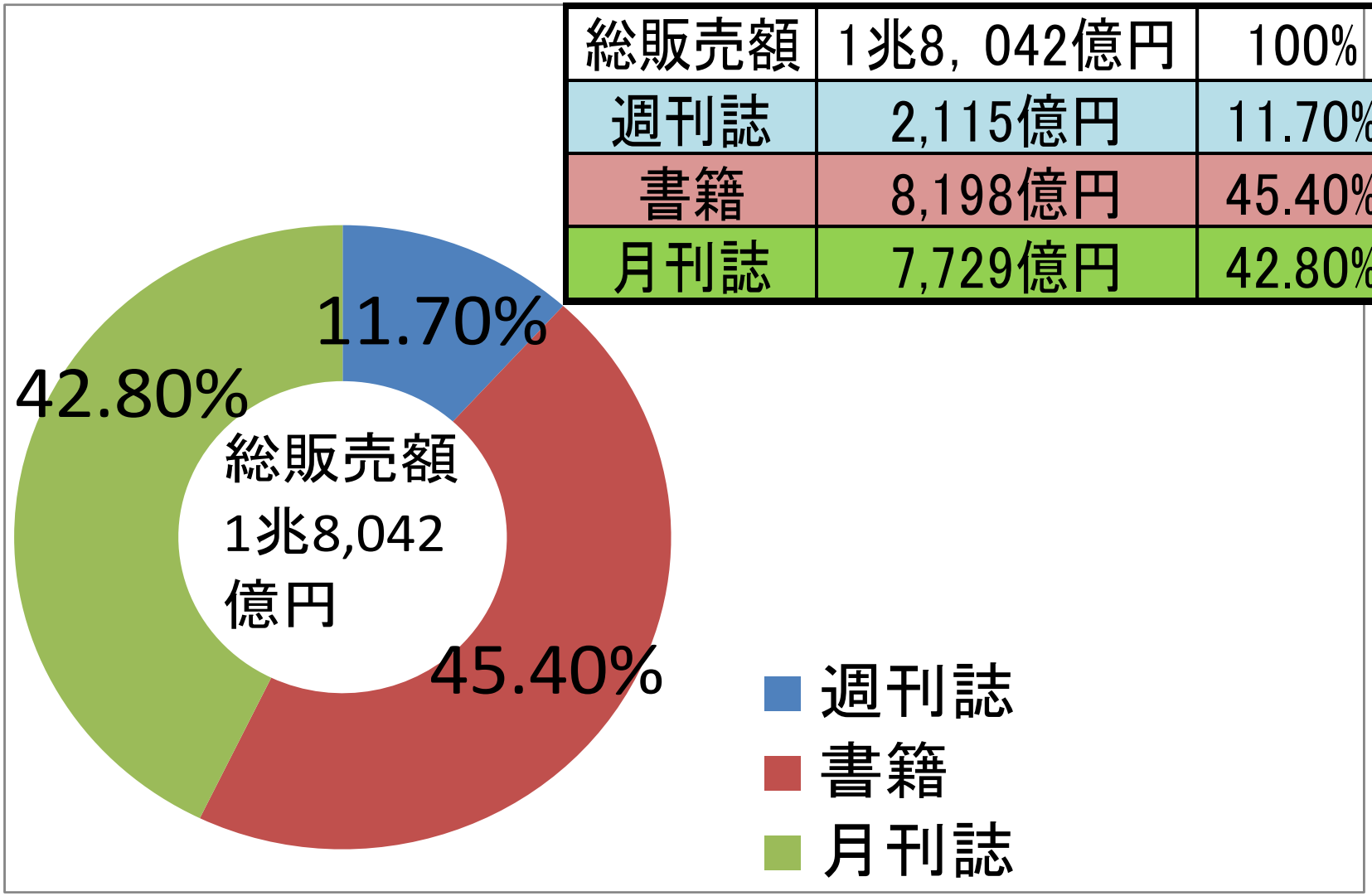


電子書籍情報まとめノート
(http://www7b.biglobe.ne.jp/~yama88/info.html)2012年7月

2011年度出版市場規模

2009年度より市場規模は2兆円を切っている

総販売額	1兆8，042億円	100%
週刊誌	2,115億円	11.70%
書籍	8,198億円	45.40%
月刊誌	7,729億円	42.80%



引用：『2012年度版　出版指標年報』　出版市場規模　より

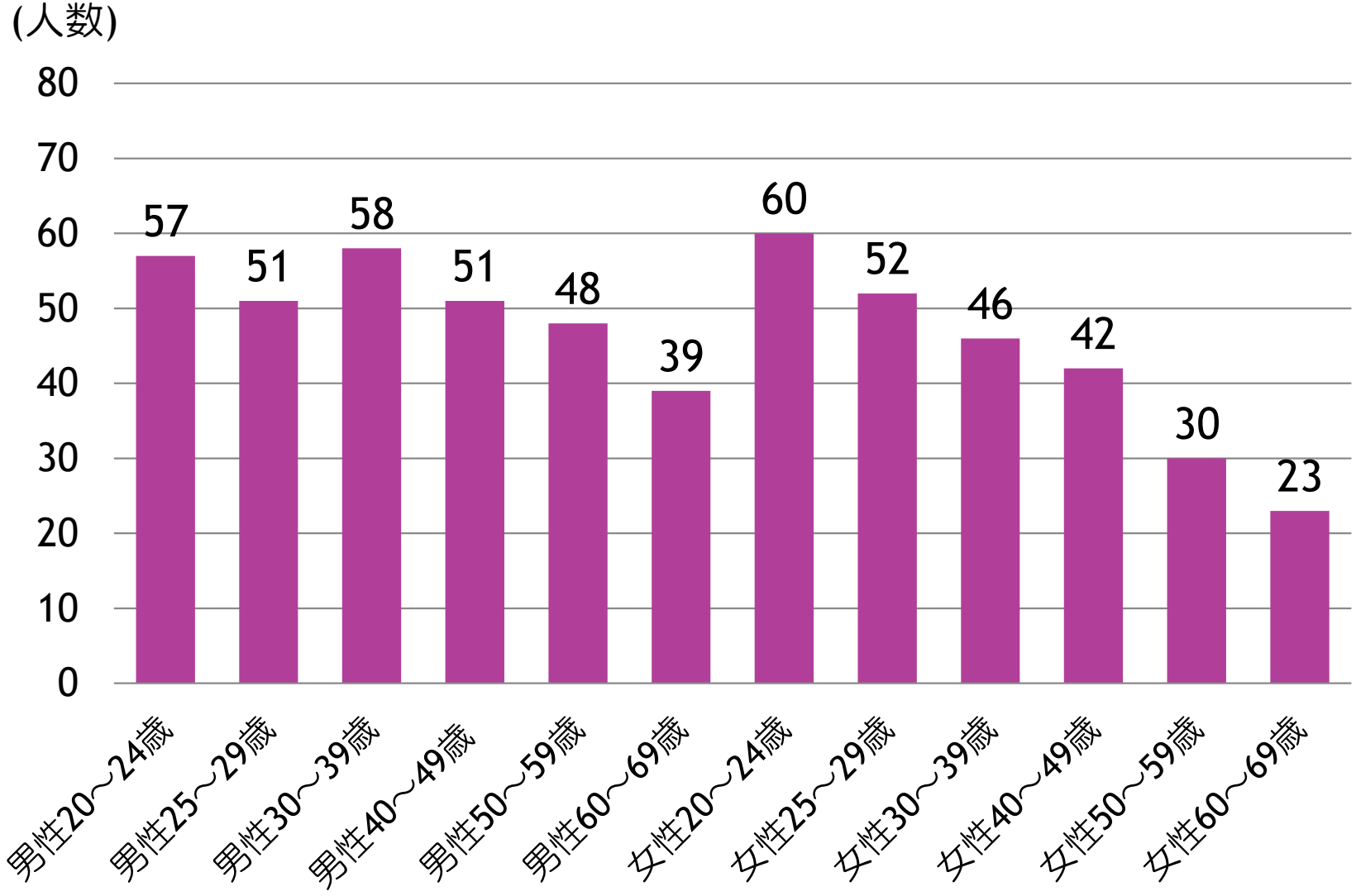
2011年の市場規模縮小の理由

①フィーチャーフォンユーザーの減少
②ケータイ向け電子書籍市場の受け皿の整備の遅れ
③予想されていた海外事業者の参入の遅れ
④電子ブックリーダーの普及の遅れ
⑤コンテンツの充実が予定通りに進んでいない

2012年以降の市場規模拡大の理由

フィーチャーフォン向け電子書籍市場の減少は続くものの、新たなプラットフォーム向け電子書籍市場が立ちあがる。よって、今後2～3年の間にコンテンツの充実や環境整備が整い、2013年度以降に本格的に拡大していくと予想されているため。

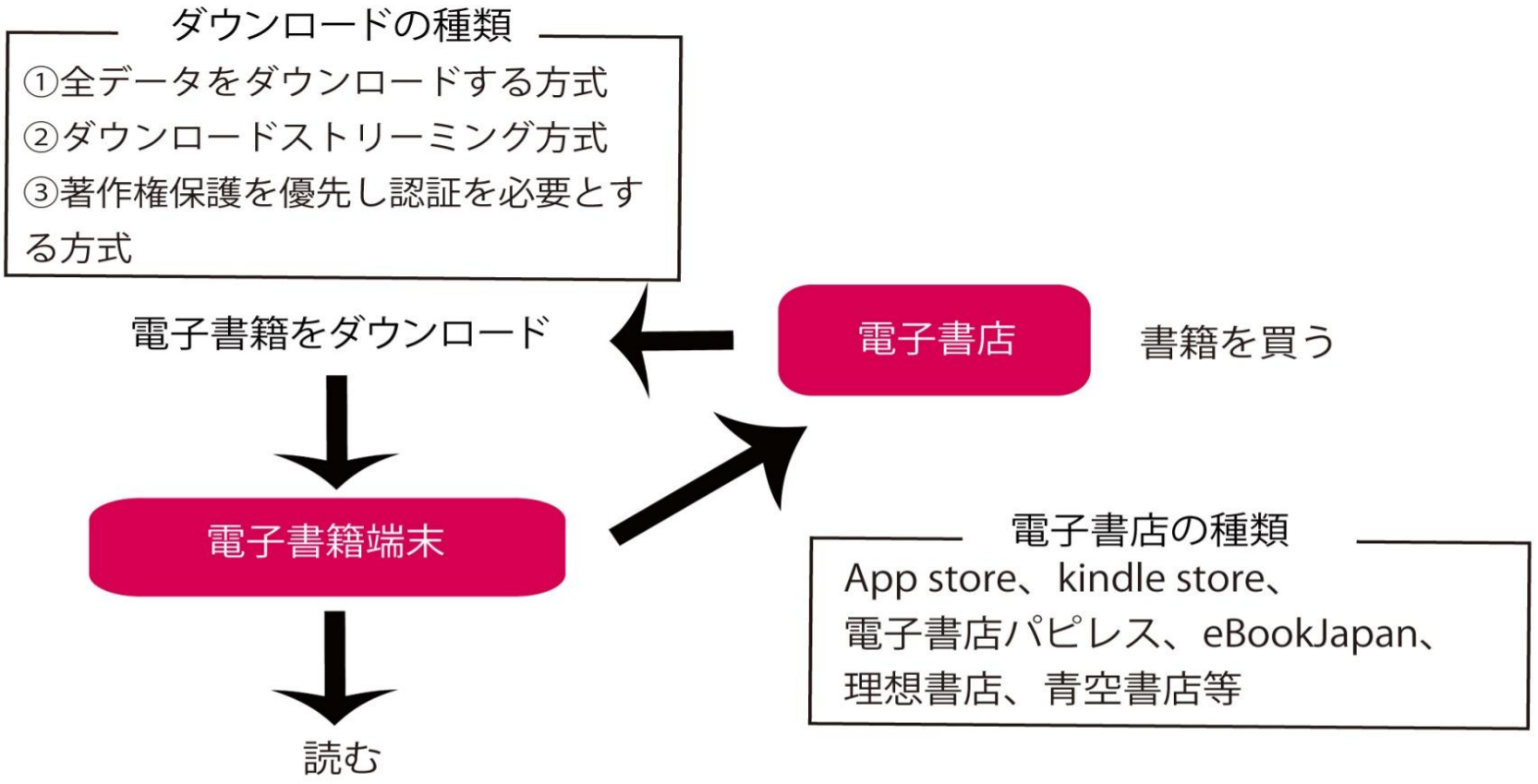
電子書籍の利用者数(性別・年齢別)



出典:株式会社エムティーアイHP

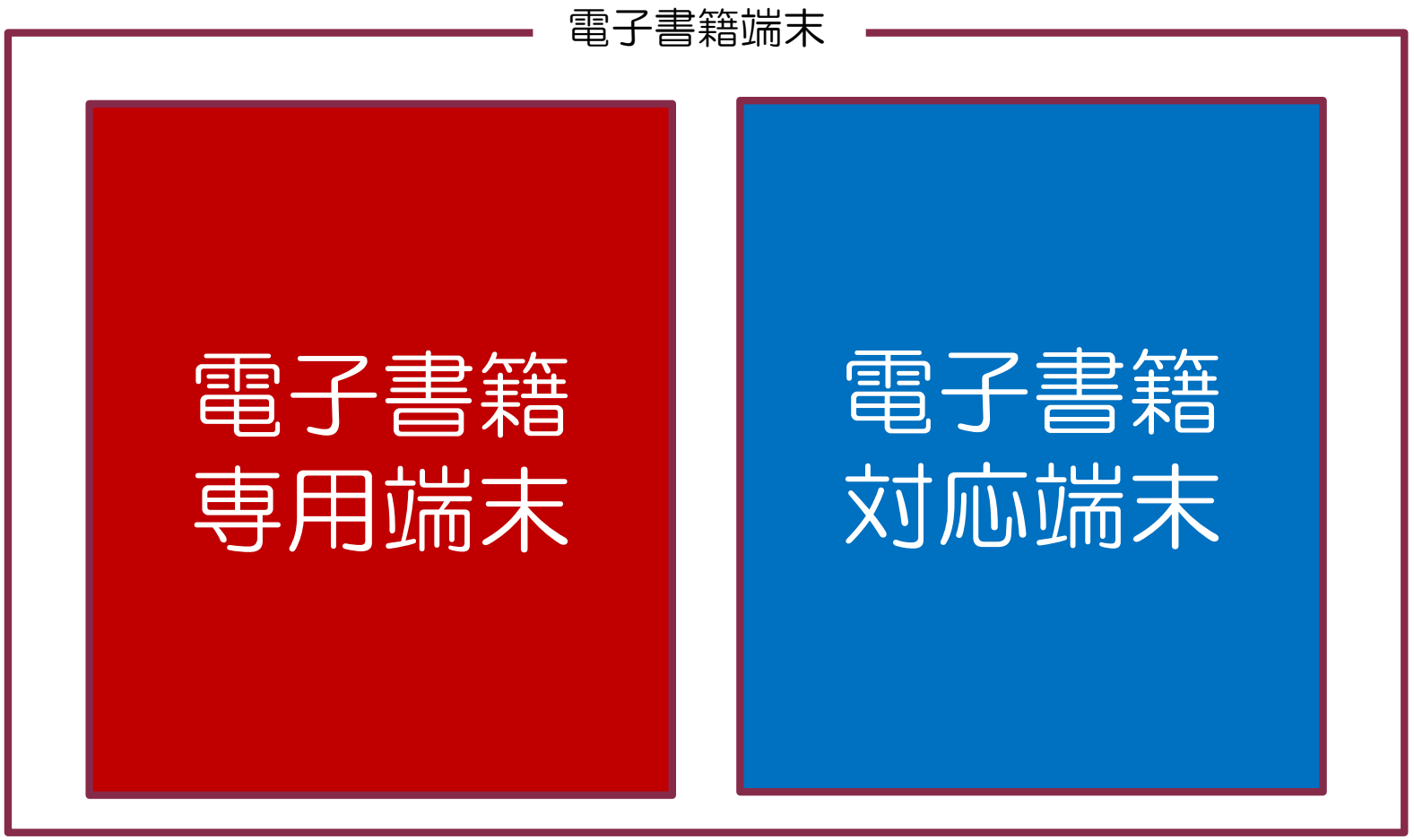
2.電子書籍の仕組み・種類

2-1.電子書籍販売の仕組み



2-2.電子書籍端末の種類

電子書籍端末は、大きく電子書籍読書専用端末と電子書籍対応端末の２つに分類される。



①電子書籍読書専用端末

Kindle

製造社

Amazon.com

(出典:Amazon.com HP)

Kobo Touch

製造社

楽天株式会社

(出典:楽天株式会社HP)

②電子書籍対応端末

タブレット型コンピューター

iPad

製造社

Apple社

(出典:Apple社HP)

Nexus7

製造社

Google社

(出典:Nexus7 HP)

スマートフォン

iPhone

製造社
Apple社

(出典:Apple社HP)

GALAXY

製造社
SAMSUNG社

(出典: **GALAXY** HP)

XPERIA

製造社
SONY社

(出典: **XPERIA** HP)

その他

ゲーム機

(出典:Amazon.com)

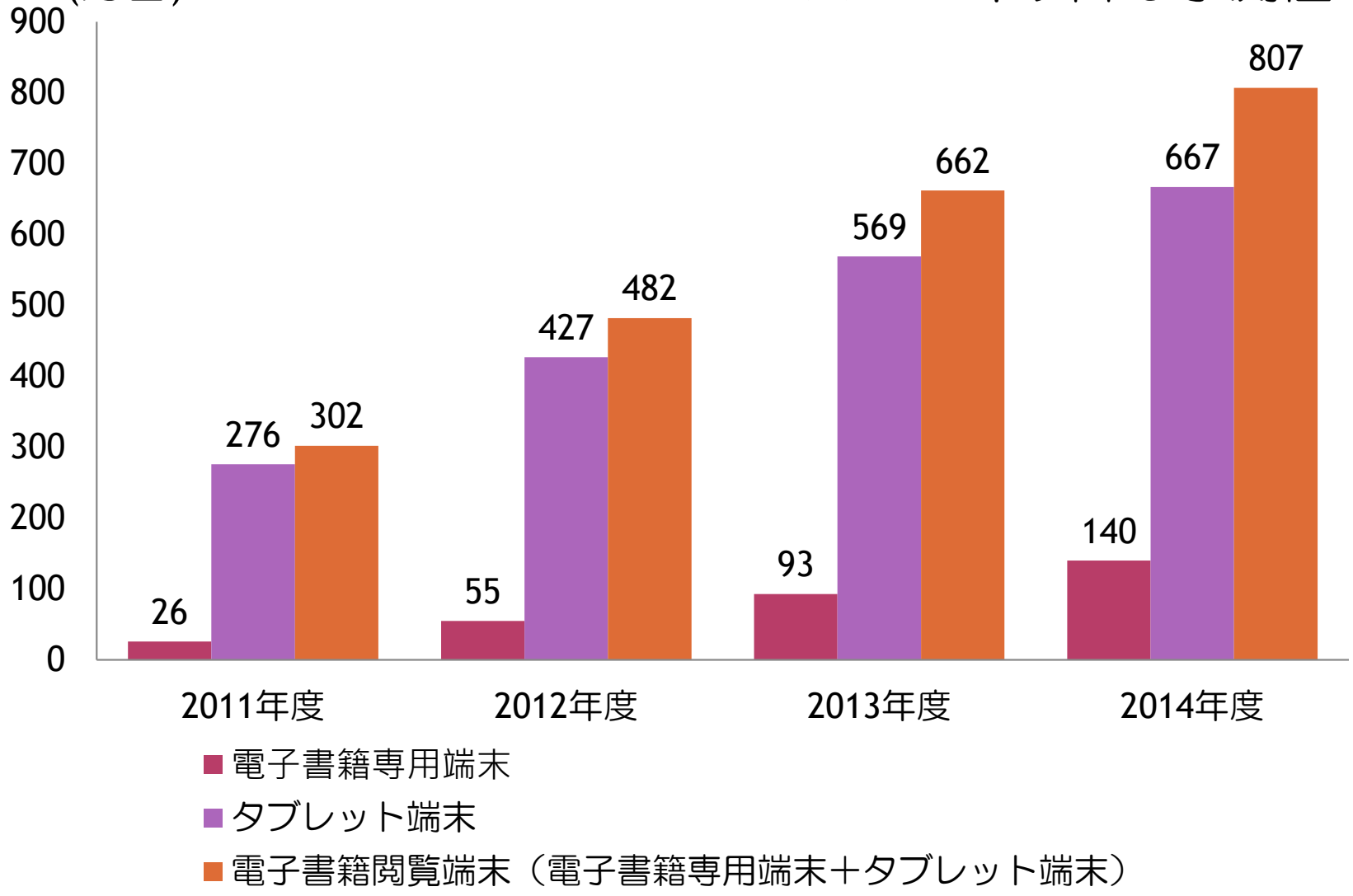
電子辞書

(出典:CASIO HP)

電子書籍閲覧端末の出荷台数規模(出典:ICT総研 2012)

(万台)

※2012年以降は予測値



電子書籍端末の種類に関する考察

・電子書籍専用端末

(Kindle、Kobo Touch等)

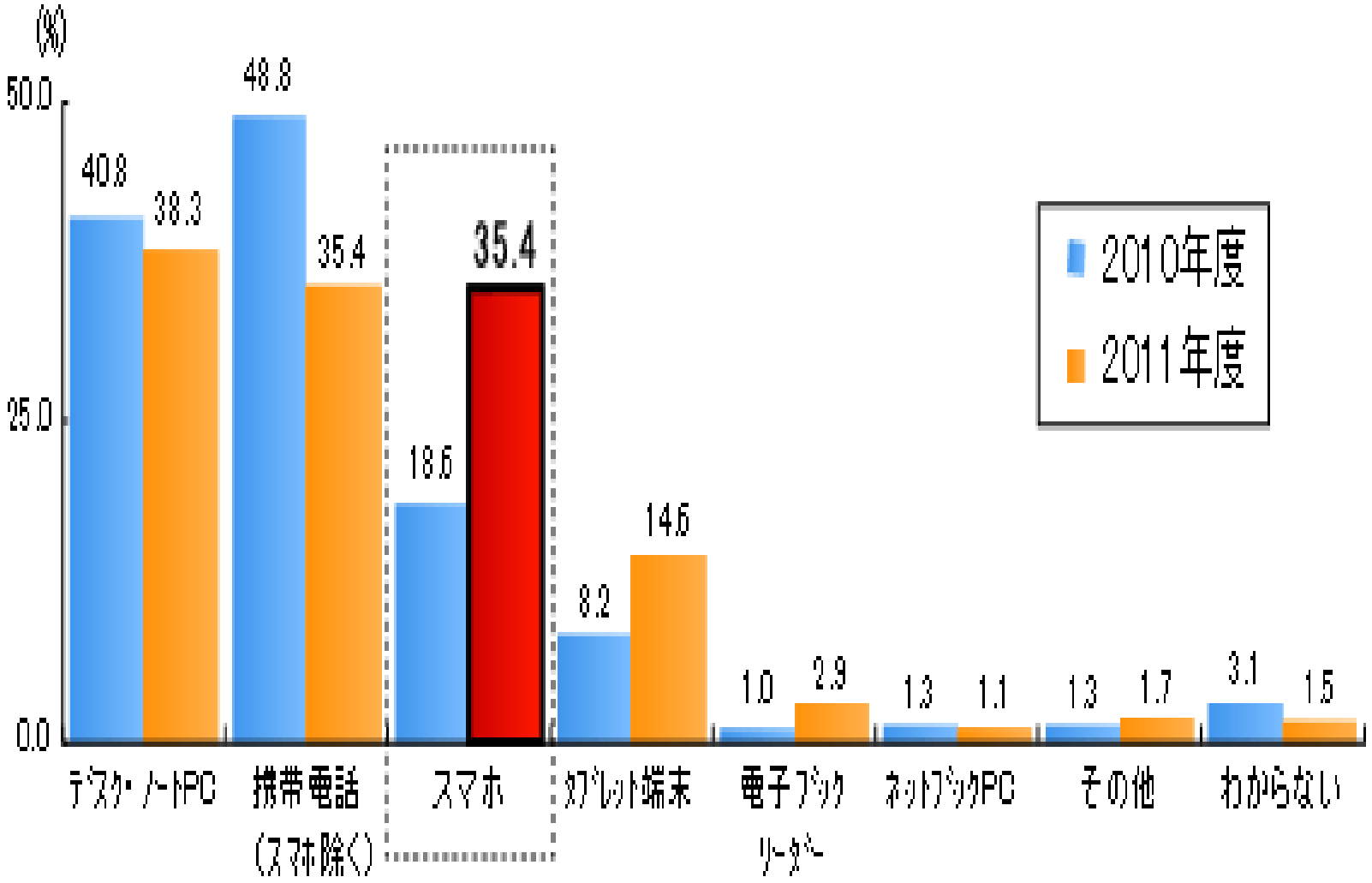
近年の急速な販売により、各社はさまざまな機能をそなえている読書専用端末を販売している。よって各社は、より利用しやすい端末の普及、価格・コンテンツ量などのサービス面での差別化が図れるようにしていかねばならない。

・電子書籍対応端末

(iPad、Nexus7、電子辞書、スマートフォン、ゲーム等)

データを表示する性能は専用端末に匹敵する。近年人気が高まってきている端末は、電子書籍専用端末ではなく、スマートフォンである。

端末別利用者数推移



(出典：ビデオリサーチ『「電子出版」利用経験について』2012年3月14日)

2-3.電子書籍のコンテンツの種類

- テキストベース

…テキストの表示がメインとなった書籍

(例)小説・学術書・エッセイ等

- 画像イメージ

…画像の表示がメインとなった書籍

(例)漫画、写真集・雑誌・図鑑

- アプリ型

…主にiPad等で楽しむ電子書籍アプリ

紙媒体にはない、音楽や動画の再生などの機能が備わっている。

(例)WIRED…米国の月刊雑誌「WIRED」のiPad版。写真のスライドショーやアニメーション、動画の再生が可能

ToyStoryRead-Along…iPadでできるアプリ型電子書籍で、映画「トイ・ストーリー」を舞台にした無料の絵本。途中でアニメーションが流れたり、ゲームができるなど子供が喜ぶ仕掛けが導入されている。

オーディオブック

・・・今後電子書籍の可能性を開くと言われている、「聴く読書」を実現した音声コンテンツ。視覚やページをめくるという行為を必要としない。

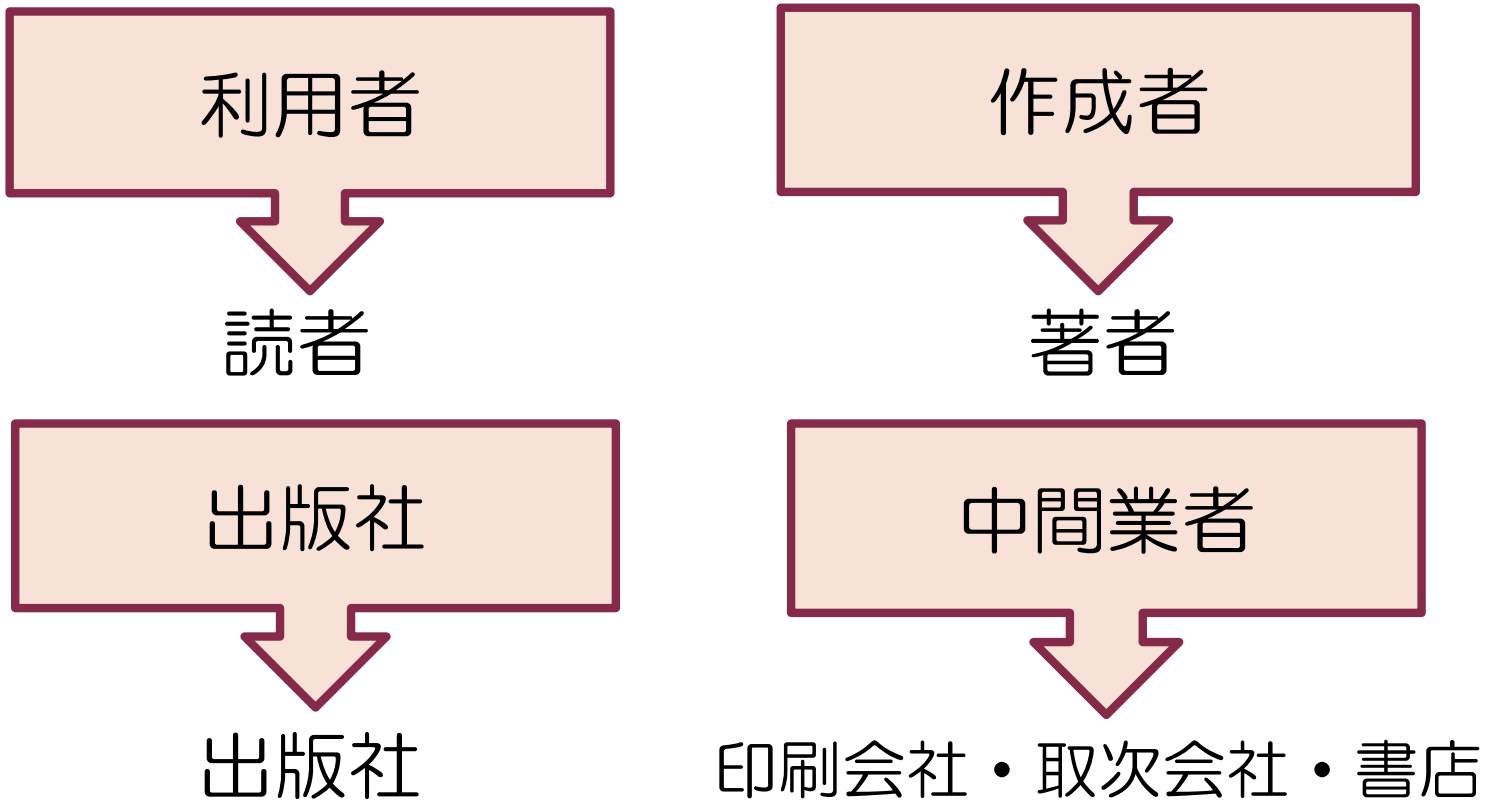
(例)朗読少女～Story Time Girl～

・・・声優が作品を朗読するiPhone, iPad用アプリ。2010年7月から配信開始し、現時点で85万ダウンロードを超えている。

電子書籍のコンテンツの種類は、従来のテキストベース・画像イメージ、アプリ型だけではなく、高齢者や障がい者でも読めるオーディオブックと呼ばれるものが普及し始めている。このことにより、現在では、利用が少ない高齢者でも気軽に電子書籍を読書することができるようになる可能性がある。

3.電子出版のメリット・デメリット

ここからは、



以上４つの立場からメリット・デメリットを考察する。

3-1.利用者側から見た電子出版

◎メリット

・大量の書籍を持ち運びする必要が無い。
・すぐに欲しい書籍を購入し、手元にダウンロードすることができる。
・印刷費や輸送費が節約され、1冊当たりの単価が下がり、購入するためのコストを抑えることができるようになる。
・本を管理するのが楽になる。
・本が劣化しない。

利用者は従来の紙の書籍より、手軽に、すぐに読みたい本が手に入るため、電子書籍を読みたいと考える。楽天リサーチ株式会社の「電子書籍を読みたい理由」の調査の結果でも、何冊も書籍を持ち運ぶ必要がなく、手軽になるからが６０％を占めている。

◎デメリット

- 機械化でかえって持ち出しに気を使う。
- 電子書籍を読む媒体が故障した場合、本が読めない。
- インターネットが整備されていないと使えない。
- 「長く読むと目に悪い」と考えられている。
- 初期費用が高い。
- 機種・サービスが多様化すると混乱を招く。

利用者が電子書籍を利用したくない理由は、主に電子書籍は紙の本の良さには劣ると考えている人が多いこと、電子書籍端末を買うためにかかる初期費用が高いことが中心である。これは、株式会社エムティーアイの調査の「電子書籍を利用したくない理由」からもわかる。

3-2.作成者側から見た電子出版

◎メリット

・著者自ら出版できる。
・素人による出版が可能になる。
・低コストで電子書籍が作れる。
・変更がいつでもできるので、著者としていつでも最新の内容にアップデートできる。

従来よりも出版物の作成が容易にできるようになる。出版物の作成にかかるコストや管理などで頭を悩ます必要がかなり減少する。

◎デメリット

・海賊版のデータ(自炊)が容易に作られる危険性がある。
・デジタル書店の仕様に合わせたデータ配信が必要になる。
・出版が容易になることで出版物の数が増える分、代替性の高い出版物は競合が激しくなる。

自炊については、利用者達のモラルの問題となる。
データ配信については、フォーマットをめぐる問題になる。

3-3.出版社から見た電子出版

◎メリット

- 紙のパッケージから自由になる。
- 過剰在庫、在庫不足がなくなる。
- 本が電子書籍化することにより、レンタル事業の拡大が見込める。

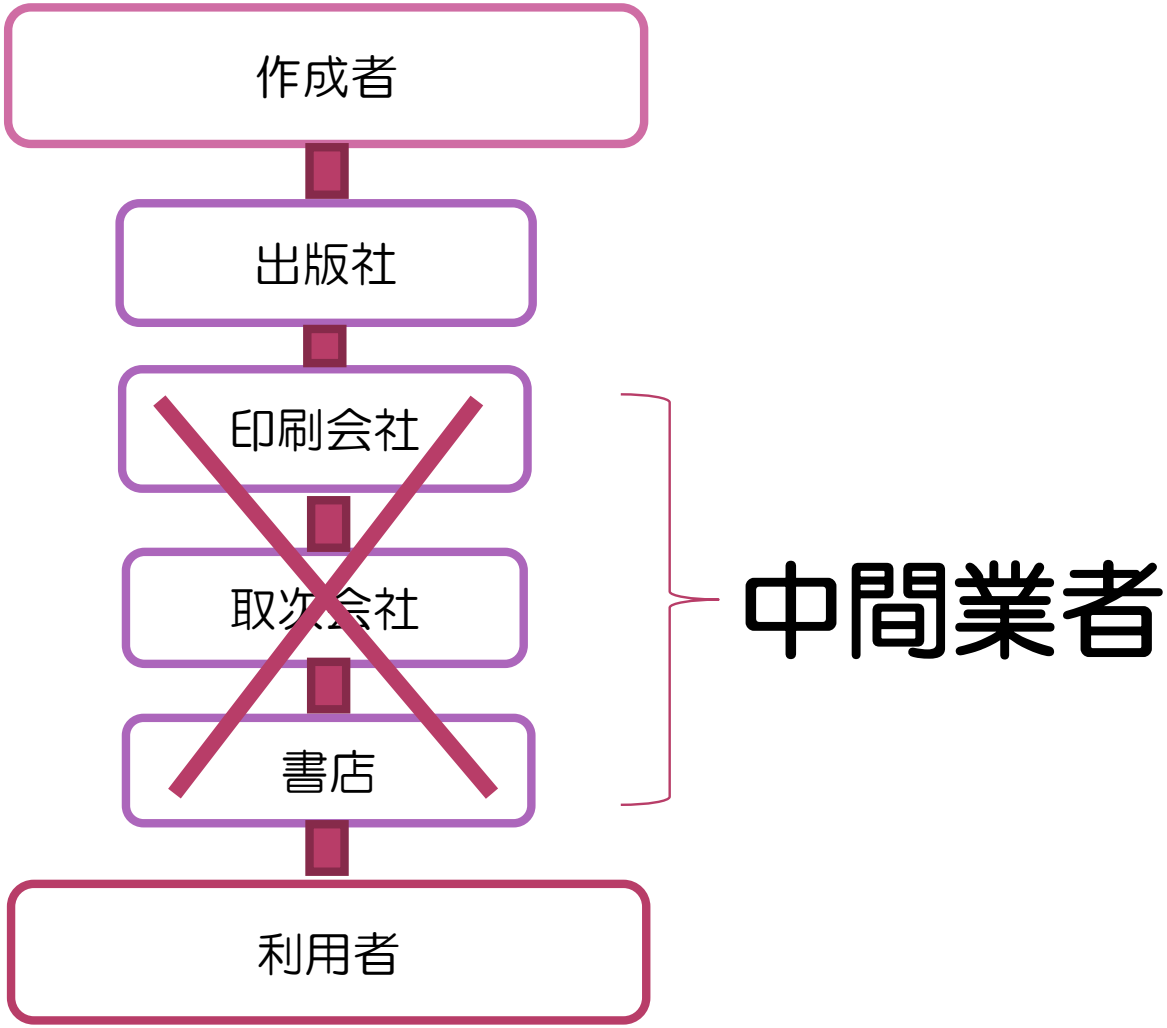
出版社にとってのメリットは、紙という耐久性の低い消費財とは違い、実体がないことである。
紙の書籍ではページの上限下限があるのに対し、電子書籍は分量や内容以外にも扱うコンテンツの自由度が増す。また、過剰在庫、在庫不足がなくなるので、経営リスクを緩和することができる。

◎デメリット

- 作家による中抜き問題
- 出版社間での競争激化問題

紙での出版の場合、新規に出版社を立ち上げるのに日本図書コード管理センターで出版社コードを取得する必要がある。だが、電子出版の場合その必要がないため新規参入が容易になる。
つまり、勝ち残るためには優れたコンテンツが必要になってくる。

中抜きとは



3-4.中間業者側から見た電子出版

◎メリット

- 電子出版を扱う企業が増加した。

従来の印刷会社や書店では、電子出版を扱う企業が増えている。そのことにより、各中間業者の仕事にも様々な影響を与え、変化がある。これらの影響と変化については次の４章にて考察する。

◎デメリット

- 電子データ化するので従来の様に印刷機で印刷、製本、倉庫での保管、輸送の必要がなくなり中抜きされる。
- 書店は中小店を中心に経営を圧迫される。

中抜きによって、印刷会社・取次会社・書店などの中間業者は経営を圧迫される可能性が存在する。これらの詳細は次の４章にて考察する。

4.電子出版による中間業者への影響

4-1.印刷業界への影響

電子化により印刷する必要がなくなるため、電子書籍の普及により一番影響をうけるのは印刷業界である。

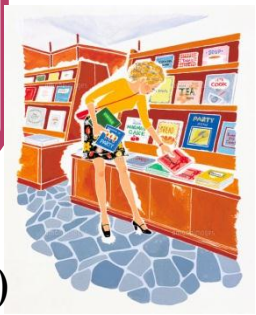
しかし電子化により、印刷がなくなる代わりに、コンテンツを電子書籍のフォーマットに加工することが必要になる。実際に、印刷会社ではこのサービスを導入している会社もある。(ex.大日本印刷、凸版印刷)

これまでの出版社との繋がりを生かして、取次業務まで事業範囲を拡大している印刷会社も出始めている。
そして、今までのやり方はやめ、新しい事業範囲を確保する必要がある。

4-2.取次会社への影響

取次会社とは？
出版社と書店をつなぐ流通業者のこと

出版社 → 取次会社 → 書店



(出典:ジュンク堂イラスト)

電子書籍の場合、配本も返本もないので物流機能が不要。
つまり取次会社を抜かした取引が行われる。
＝「中抜き問題」

しかし物流が不要になってもコンテンツ管理など取次会社の役割はなくならず電子書籍取次として役割が変化する。

4-3.書店への影響

電子出版の普及に伴い、紙媒体だけを扱う書店は淘汰されていくのではないかと懸念されている。

アメリカでは・・

電子書籍の普及により大手書店では、経営が急激に悪化している。

(例)バーンズ＆ノーブル(Barnes&Noble)

日本では・・

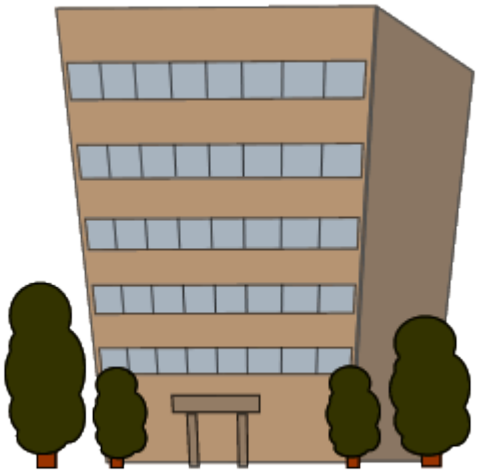
書店の減少は確かであるが、一概にも電子書籍の登場が原因とは言えない。例えば、大型書店により、中小規模の書店の顧客が吸収されている問題もある。

書店には、電子出版市場では提供できない強みが存在するので、電子出版が登場することで書店が消えることはない。

5.電子出版の課題

5-1.出版社と著作者の契約に関する問題

◎出版社への著作隣接権付与をめぐり対立



対立

新たな権利
著作隣接権

出版者

著者

出版社の権利
出版権

著者の権利
著作権

＜出版社が著作隣接権を求める理由＞

◎ 権利処理手続きが円滑になる。
⇒迅速に電子化が可能になる。
※出版権ではインターネット配信はできない。
⇒電子書籍などの電子媒体に対応しない。

◎ 権利侵害に対して出版社自ら対応できる。
⇒海賊版を発見した場合、出版社の判断で訴訟を起こすことが可能になる。

＜問題点＞

◎ 新たな権利者を増やすことで配信事業者などの新規参入の阻害につながる可能性があること

⇒著者は他の出版社で再刊行できなくなる可能性。

◎ 海外における実効性の欠如

⇒海外での著作権侵害は対応できない。

◎ 二次創作物の作製禁止

⇒同人雑誌などが作れなくなる可能性。

※同人雑誌とは正規漫画の二次創作物。

⇒日本のサブカルチャーの衰退。

※同人雑誌を販売する“コミックマーケット”が開催できなくなるため。

＜海賊版の不正ダウンロードについて＞

今年、著作権法が改正され違法にアップロードされている著作物をダウンロードすることが刑罰の対象となる。

対象

- 音声ファイル
- 動画ファイル

対象外

- 小説や漫画などの画像ファイル
- テキストファイル
- アプリケーション

⇒対象となるのは音声及び動画ファイルの不正ダウンロードのみで電子書籍は不正ダウンロードによる刑罰の対象にならない。

著作隣接権問題

文化庁で検討会議が行われていたが、著者の不利益が大きいために慎重な判断が必要とのことで継続審議に至っている。著者の利益を守ることを考えれば、部分的付与が望ましいであろう。

不正ダウンロード問題

海賊版電子書籍の不正ダウンロードが刑罰化されないことで、不正にダウンロードする者が減らず、市場が停滞する可能性がある。海外サーバーを除く海賊版のアップロードを減らすには出版社への著作隣接権付与が有効である。

5-2.フォーマット乱立問題

電子書籍に関するフォーマットとは

①PCなどの情報機器で利用するデータの保存形式のこと。
②電子書籍のコンテンツを特定の利用方法やアプリケーションソフトウェアで共通に扱うための形式や規格のこと。

例）EPUB(IDPF提供)　　AZW/TOPAZ（Amazon提供）
　　XMDF（シャープ提供）　PDF（Adobe提供）

　現代では多くの電子書籍専用端末が登場しているが、その分フォーマットも多様化している。
　　⇒フォーマット乱立問題が発生する。

乱立問題で考えられる４つの立場からの弊害

利用者からみると

端末によってデータ閲覧可能、不可能が発生する問題や端末と端末間とのデータの互換性がなくなるという問題がある。

出版社、作成者からみると

電子化作業を何回もしないと多数あるフォーマットに対応できず、コスト・時間的に非効率である。

中間業者からみると

コスト削減を目指し、フォーマットの種類を限定してしまうと、その分顧客の数が制限されてしまう問題がある。

乱立問題を解決するには

中間フォーマットの導入が必要

・中間フォーマットとは、あらゆるフォーマットに対応し、複数のビュワーを搭載できるように設定するフォーマットのことである。

→出版社、中間業者の立場からみると、すべてのフォーマットに対応できるので効率的な販売ができるようになる。

→利用者の立場からみると、１台の読書端末ですべてのデータを購入し、閲覧できるようになる。

フォーマット乱立問題のまとめ

・現状では、中間フォーマットは技術的な問題が残されているため実践されておらず、浸透には時間がかかると見込まれている。だからといって強制的にフォーマットを１つに統一することは難しいし、利用者・出版社側にも不利益が生じることになる。

例）VHSとベータの競争。

フォーマットは、新しいものに統一するよりも既存のフォーマット全てに対応できるように“融合”していくべきである。

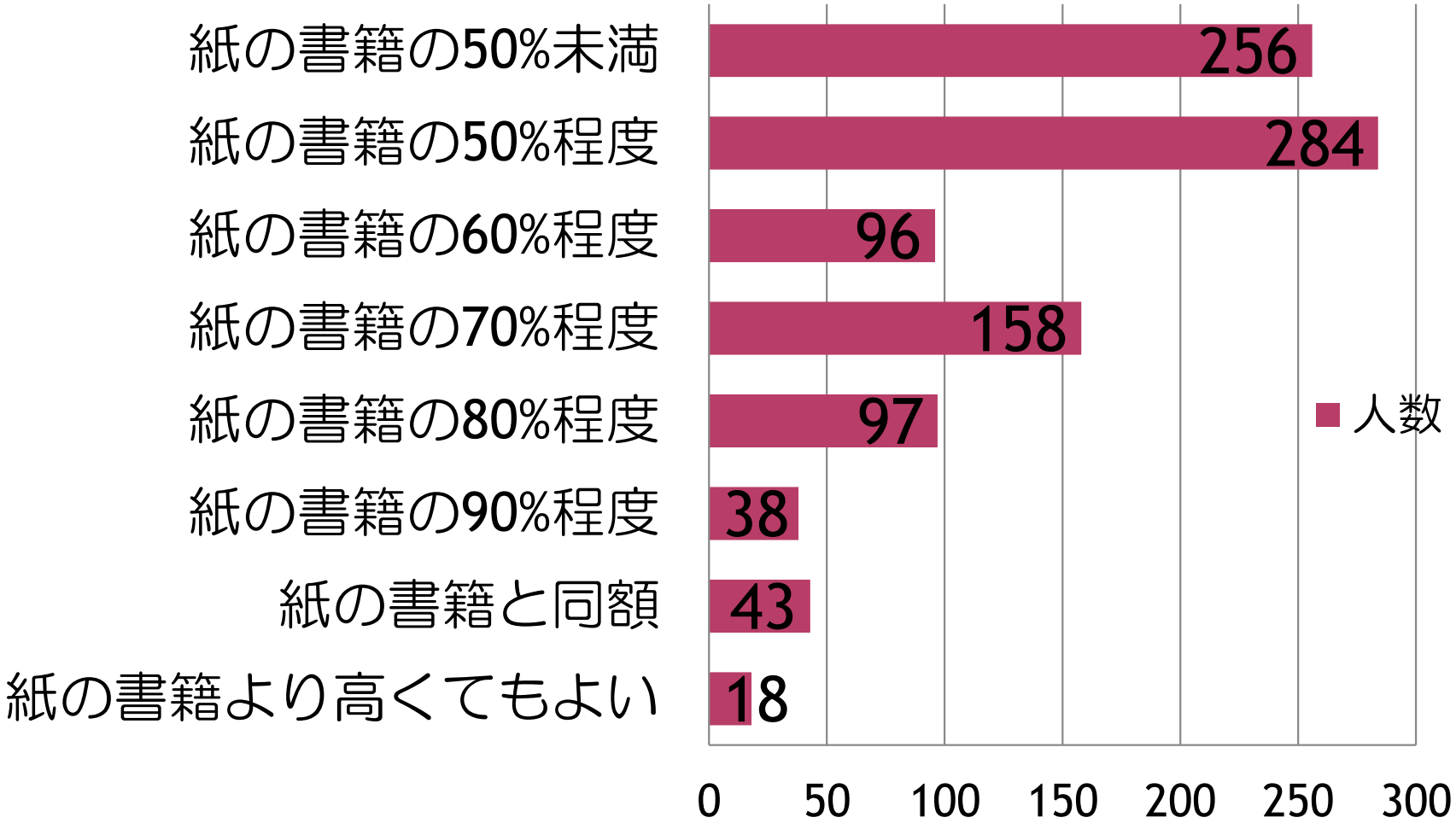
5-3.電子書籍の価格・販売の問題

現在、電子書籍の価格設定が問題となっている。また、新刊本の電子化もあまり進んでいない。

- 価格はどの程度が妥当なのか。
- 新刊はいつ電子書籍になるのか。
- 著者、出版社が電子化に積極的ではないのはなぜか。

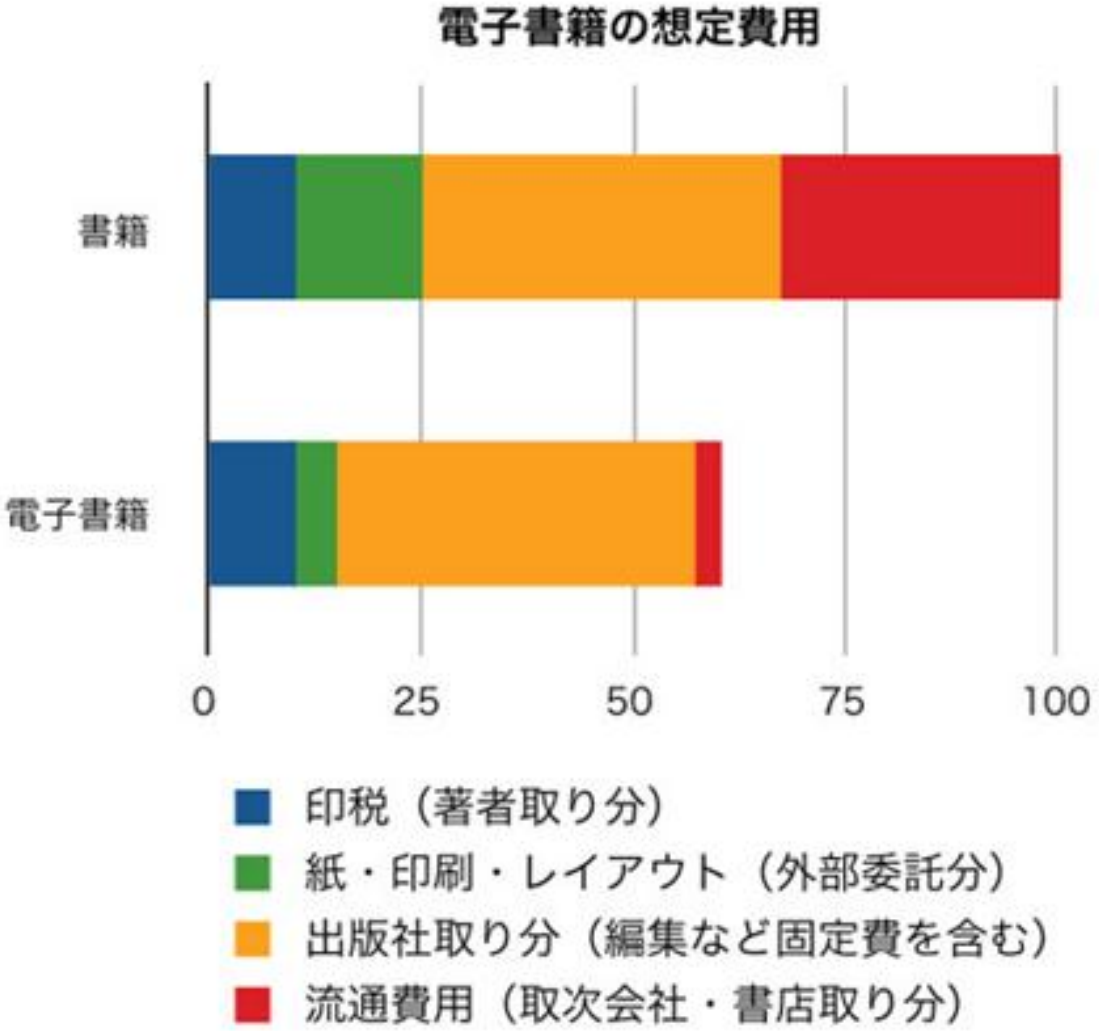
電子書籍の価格はいくらが妥当か(出典:AppBank 2012年)

（総人数990名）



紙の書籍価格の50%程度⇒利用者側から見た妥当線

価格設定における出版社の立場



⇒一般書籍の半額以下販売は厳しい

単行本・文庫本と電子書籍の価格の違い

単行本：1,575円
(2010年9月発売)
文庫本：670円
(2012年10月発売)
電子版（単行本版）：662円
(2012年10月発売)

◎現在、電子書籍は単行本の文庫化と同時期に刊行される傾向がある。

◎電子書籍の価格は文庫本とあまり変わらない。

単行本と電子版が同時刊行された主な書籍と紙書籍の金額に対する電子書籍の金額の割合(2012年5~6月の刊行物)

	割合	紙書籍	電子書籍
『独立国家のつくりかた』	85.6%	798円	683円
『フェイスブックが危ない』	100%	714円	714円
『実験的経験-Experiment experience』	81.3%	1,680円	1,365円
『光』	62.5%	1,680円	1,050円
『フェイスブックをつくったザッカーバーグ氏の仕事術』	90.0%	1,000円	900円

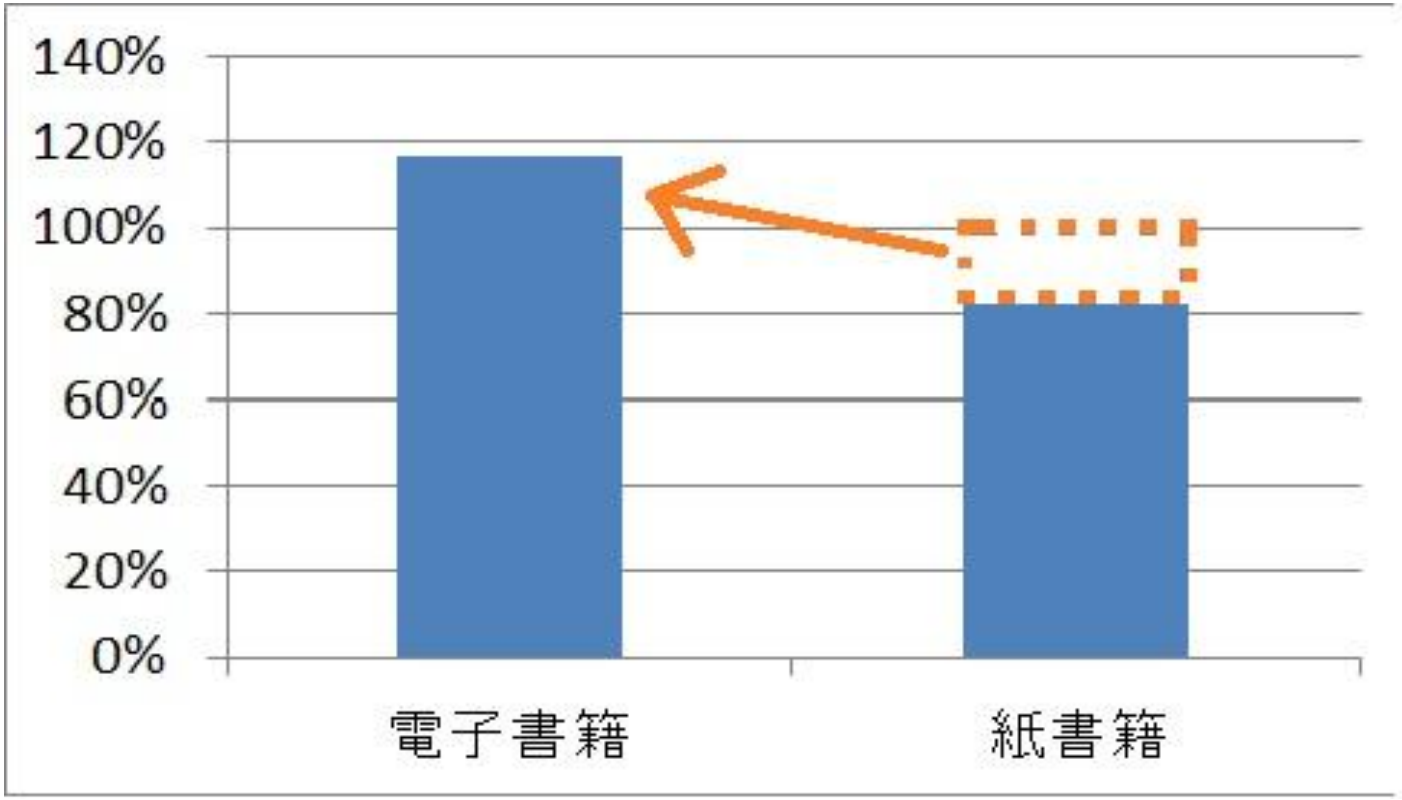
出版社が同時刊行しない理由

　現状の電子書籍の流通の仕組みだとマンパワーやオペレーションでの負荷が大きく製作作業において手間がかかるため。

解決策

電子書籍市場は発展途中にあるため、電子書籍流通させる仕組みもまだ改善の余地がある。今後、電子書籍の製作作業において製作作業を専門とする業者が多く出てくることで電子化作業がスムーズになり、同時刊行も行われていくと思われる。

なぜ電子化に積極的にならないのか



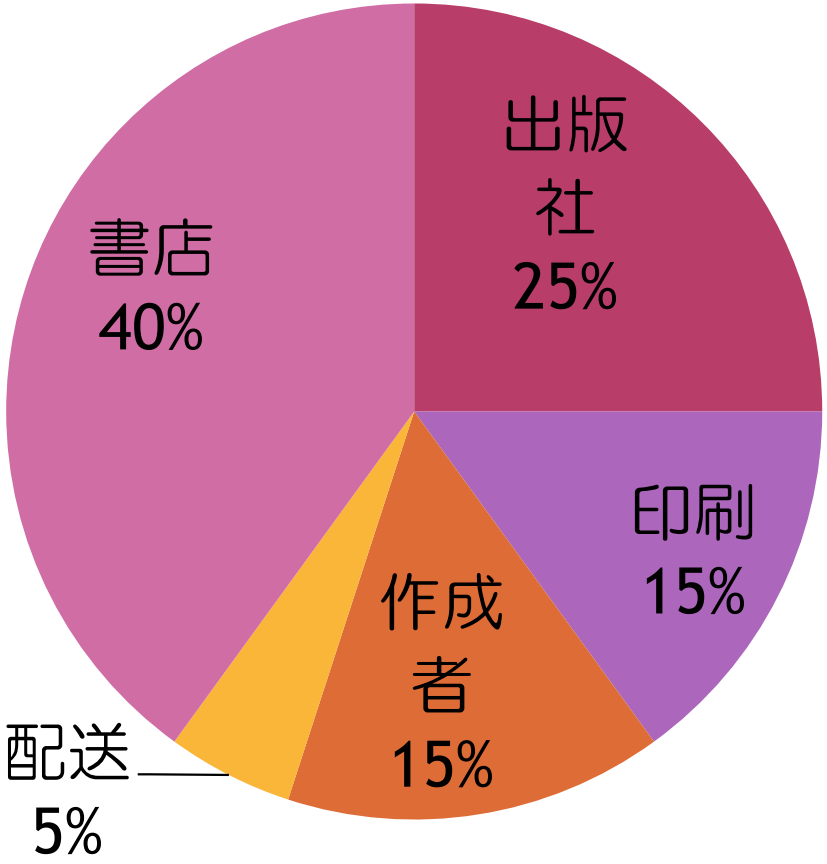
＜米国出版社(APP)の発表＞

2011年の電子書籍の売上の上昇分は＋17%(5億ドル)

⇒成年向けハードカバーとペーパーバックの売上減少分とほぼ等しい。

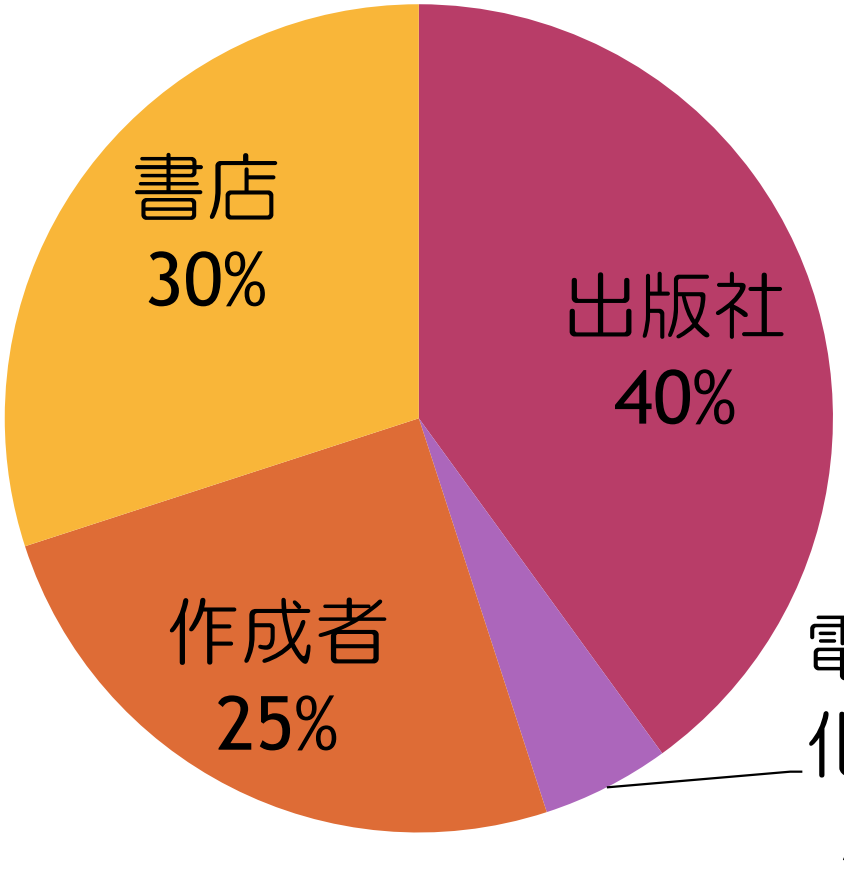
書籍の売り上げ配布率(アメリカ)

アナログ書籍



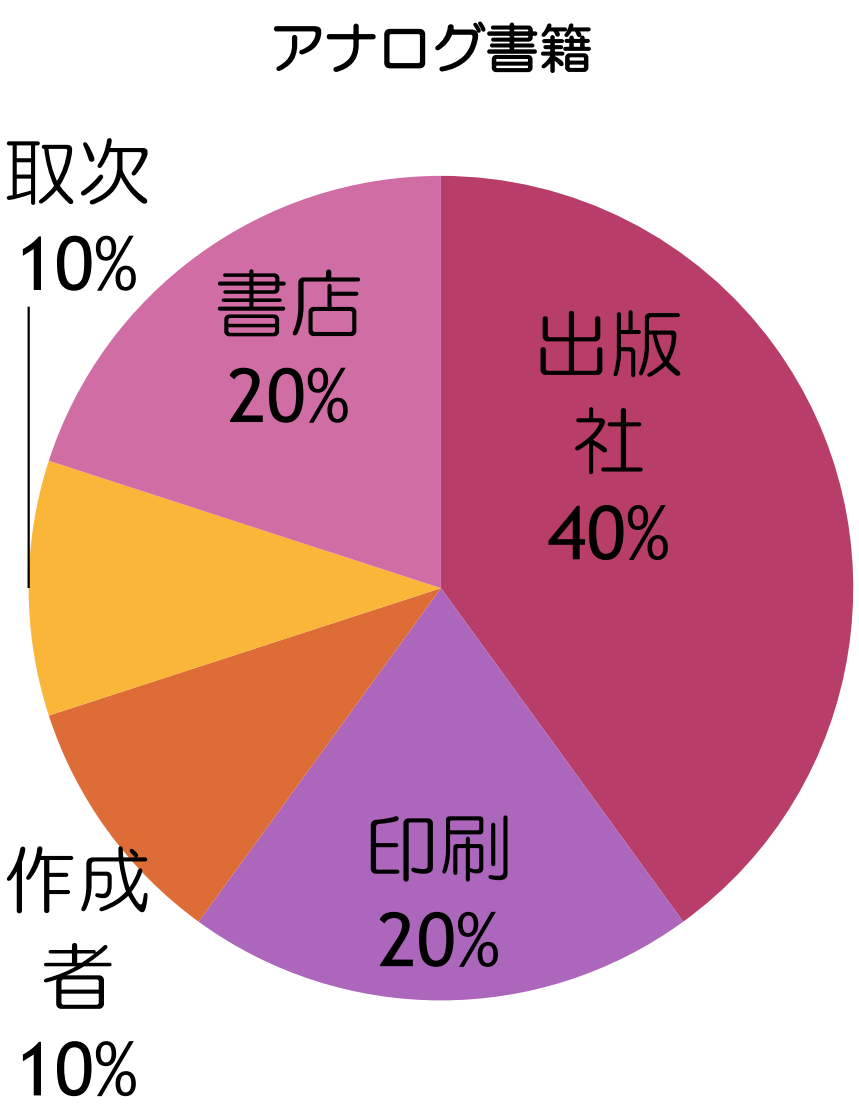
電子書籍（Amazon）

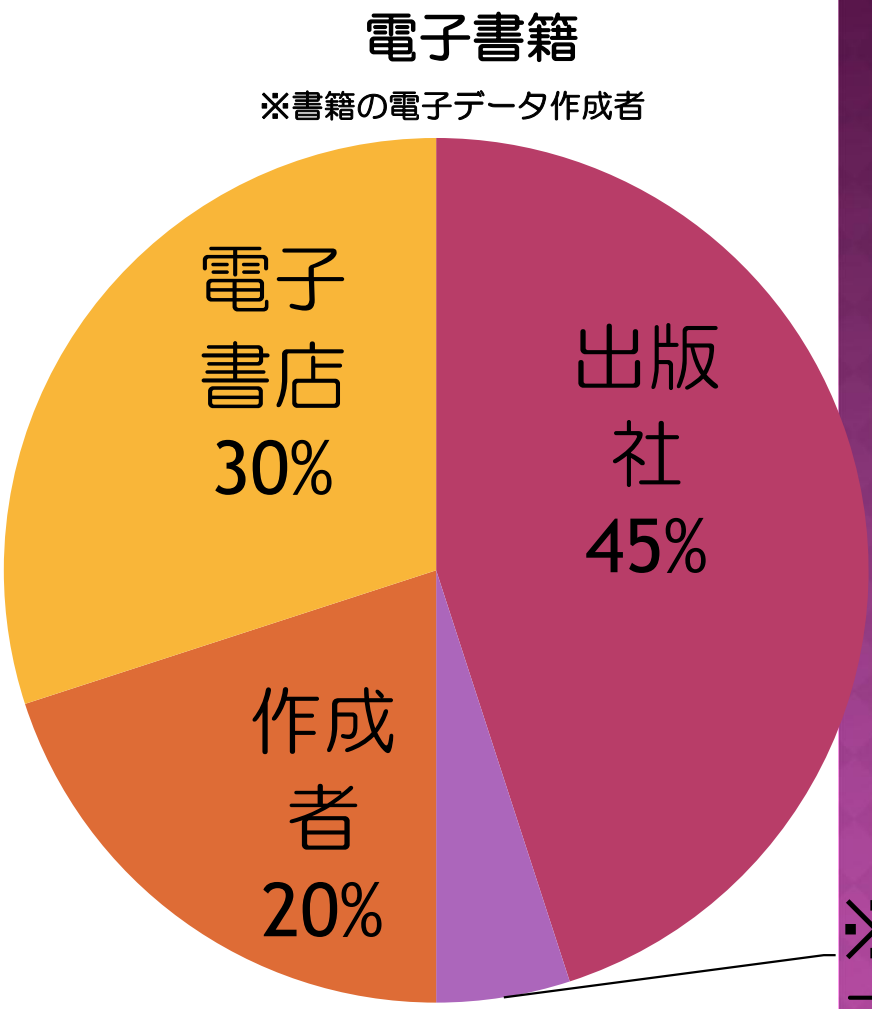
※書籍の電子データ作成者



⇒電子化に積極的になる

書籍の売り上げ配布率(日本)





1,000円の紙書籍を電子版で500円で販売した場合(日本)

＜紙の書籍＞

出版社:1000×40%=400円※
著者:1000×10%=100円
書店:1000×20%=200円

＜電子書籍＞

出版社:500×45%=225円
著者:500×20%=100円
書店:500×30%=150円

※日本の出版社は返品を請け負っているため、定価に対する配分を多くとっている。なお、日本には再販制度があるため出版社は平均4割程度の返品がおこり、全額は受け取れない。

⇒あまり電子化に積極的にはならないと予測される。

紙書籍と電子書籍を購入した場合の比較

1,000円の紙書籍を電子書籍(価格800円)で購入した場合

※800円＝同時刊行された電子書籍の平均金額。

◎7,980円のKobo Touchを購入

→39.9冊購入すると、紙書籍で購入した場合と同額になる

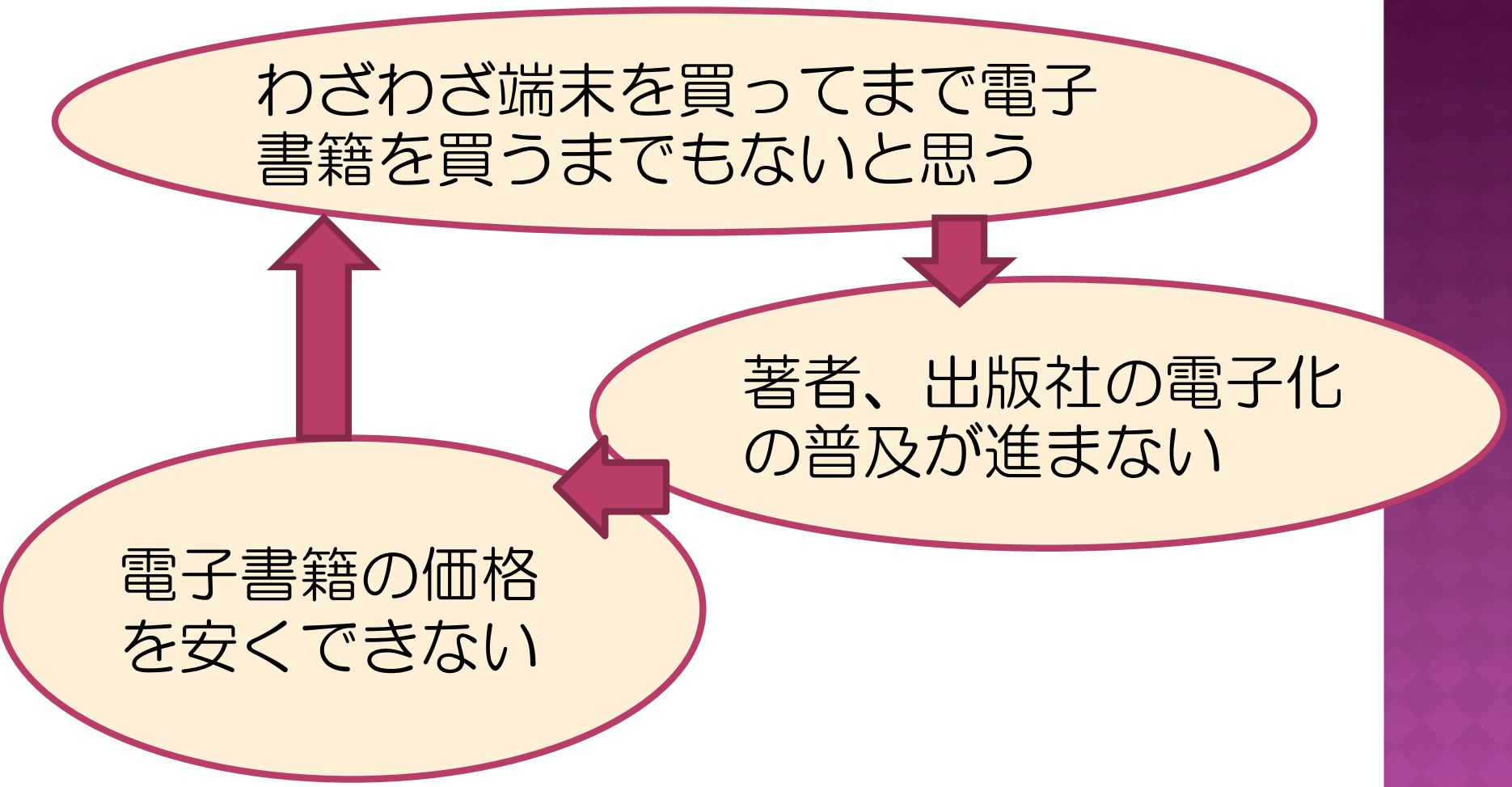
[1,000×39.9=800×39.9＋7,980=39,900]

◎23,500円のKindle fire(16GB)を購入（輸入品）

→117.5冊購入すると、紙書籍で購入した場合と同額になる

[1,000×117.5=800×117.5＋23,500=117,500]

多くの本を読まなければ読者側にとっては損になる



“負のスパイラルになっている”

電子書籍の価格・販売問題のまとめ

以上から、利用者側が希望する電子書籍の価格に著者や出版社は答えるのが困難な状況である。

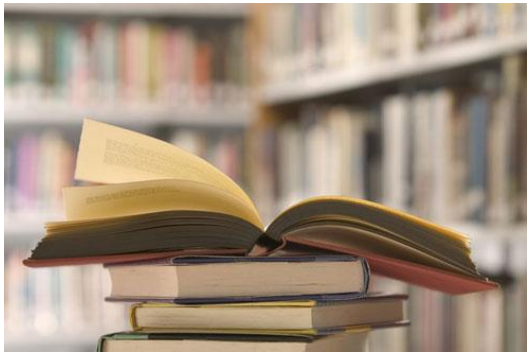
また、価格問題は電子書籍の販売時期にも影響を及ぼし負のスパイラルを引き起こしている。

日本で電子出版が普及していくうえで、電子書籍の価格・販売問題は重要なこと。

日本が、アメリカのような売上配布率を取り入れて電子化に積極的になれば、徐々にではあるが紙書籍と電子書籍の同時刊行や利用者の希望する価格を設定することが可能になるだろうと予想される。

6.電子出版の展望

利用者・作者・出版社・中間業者の４つの立場で電子出版を見てきた。「読書」という行為は変わらないが、出版業界は大きく変わってきた。2012年現在、電子書籍専用端末が多く発売され、またコンテンツの内容や量も充実してきている。権利、価格など問題があり日本では急激な普及はしていないが、今後は電子書籍の流通は徐々に拡大し、電子出版が台頭していくだろう。



しかし、紙書籍・雑誌の方がいい点もある。

例えば新聞や雑誌は、画面サイズに干渉せずに記事や見出しを自由自在に配置できる。表紙を眺めたり、紙をめくる動作などアナログ書籍にしかできない点はいくつもある。このことを好む人も多いようだ。

したがって、電子出版が台頭すると考えられるが、アナログ書籍が完全に駆逐されることはないだろう。電子出版が活発化していく中で、アナログ書籍も存在する“共存”の状態が続いていくはずだ。

今後も電子出版の動向と、出版界がどのように変化していくかについて、研究していきたい。

7.参考文献・URL

7.参考文献・URL

- 『電子書籍の可能性と課題がよ～くわかる本』高橋暁子 秀和システム　2010年
- 『電子出版の未来図』立入勝義 PHP新書 2010年
- 『米マイクロソフトがバーンズ&ノーブル電子書籍事業に出資へ』 ロイター通信　2012年5月1日
- 『電子出版と紙の出版物のシナジーによる書店活性化事業調査報告書』　一般社団法人日本出版インフラセンター　平成22年度書籍デジタル化推進事業　2012年2月29日
- 『出版を考える』西尾能雄 未来社 1985年
- 『出版大崩壊』山田　順　文藝春秋 2011年3月
- 『2015年の電子書籍』東洋経済新報社,2011年
- 『電子書籍革命の真実』西田宗千佳著エンターブレイン,2010年
- 『iPadVS.キンドル 日本を巻き込む電子書籍戦争の舞台裏』西田宗千佳著エンターブレイン,2010年
- 『電子書籍の時代は本当に来るのか』歌田明弘著筑摩書房,2010年
- 『デジタル時代の著作権』野口祐子著　筑摩書房,2010年
- 引用：社団法人　全国出版協会・出版科学研究所著　『2012年度版出版指標年報』

- 『週刊アスキー2012年10月30日号』,アスキーメディアワークス発行
- ビデオリサーチ

(http://mikke.g-search.jp/QIPS/image/sample/EL071097.pdf)

- 日本雑誌協会

(http://www.jbpa.or.jp/nenshi/)

- 荒井敏夫『電子書籍は出版の危機を救えるか』2012年7月2日
(https://sites.google.com/site/jepasite/message/)
- IT総合情報ポータル「ITメディア」2012年5月9日「緊デジ事業の本申請始まる――出版デジタル機構のビジネスモデルも明らかに」

(http://ebook.itmedia.co.jp/ebook/articles/1205/09/news073.html)

- 一般社団法人 日本出版取次協会(http://www.torikyo.jp/)
- 「米マイクロソフトがバーンズ＆ノーブル電子書籍事業に出資へ」

http://jp.reuters.com/article/technologyNews/idJPTJE83T00Y20120430 ロイター通信,2012年5月10日

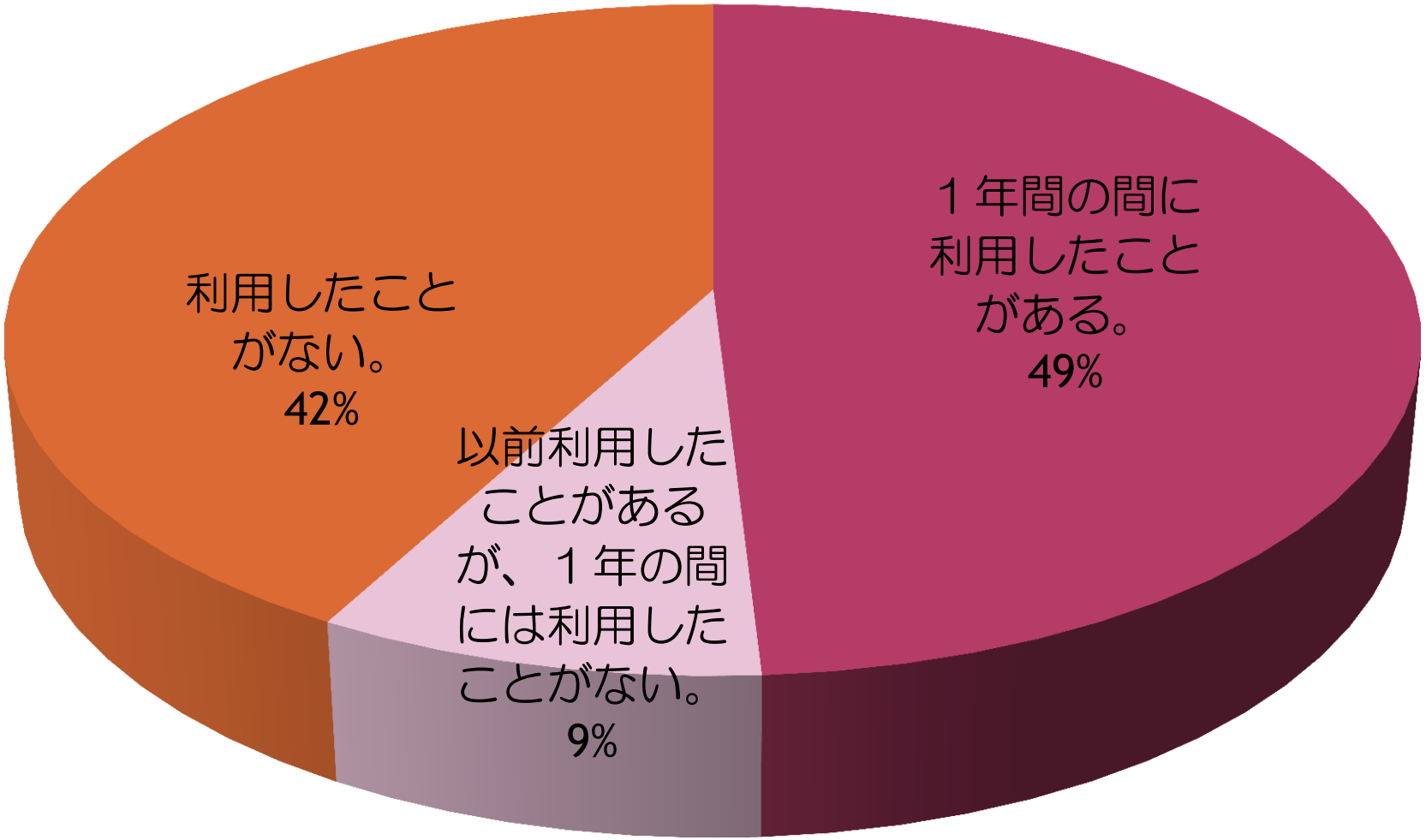
- 書店廃業店舗数

(http://www.zakzak.co.jp/economy/ecn-news/news/20120524/ecn1205241233008-n1.htm)

- 「吉田克己の電子書籍フォーキャスト」
  http://diamond.jp/category/s-yoshida-ebook ,ダイヤモンドオンライン,2012年5月10日
- 著作隣接権とは
(http://www.cric.or.jp/qa/hajime/hajime4.html)
- 電子書籍のコスト図
（http://bizmakoto.jp/makoto/articles/0903/24/news003_2.html）
- キンドルコスト図
(http://blog-imgs-31-origin.fc2.com/d/o/u/doubleko/01ebook_g-popup.jpg)
- キンドル市場
(http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%A2%E3%83%9E%E3%82%BE%E3%83%B3%E3%83%BB%E3%82%AD%E3%83%B3%E3%83%89%E3%83%AB#.E3.82.AD.E3.83.B3.E3.83.89.E3.83.AB.E3.82.B9.E3.83.88.E3.82.A2)

補足資料

電子書籍の普及率



出典:株式会社エムティーアイHP

女性のスマートフォンの利用率

		n	Q1			
			通常の携帯電話（フィーチャーフォン）	スマートフォン	タブレットＰＣ（モバイル利用）	タＰ宅
男女全体		2200	39.3%	32.9%	5.3%	
女性	15歳～19歳	100	43.0%	45.0%	2.0%	
	20歳～24歳	100	41.0%	59.0%	3.0%	
	25歳～29歳	100	44.0%	51.0%	1.0%	
	30歳～34歳	100	46.0%	37.0%	3.0%	
	35歳～39歳	100	35.0%	36.0%	5.0%	
	40歳～44歳	100	54.0%	12.0%	1.0%	
	45歳～49歳	100	38.0%	20.0%	2.0%	
	50歳～54歳	100	48.0%	16.0%	2.0%	
	55歳～59歳	100	43.0%	11.0%	2.0%	
	60歳～64歳	100	36.0%	6.0%	1.0%	
	65歳～69歳	100	41.0%	6.0%	1.0%	

Kindle

Amazon.comが製造、販売を手がける電子書籍読書専用端末。

- 価格は16GBで299ドル(約23,500円)32GBで369ドル(28,800円)
- 重量は241g程度。
- 画面サイズ8.9インチ
- 容量として約60万冊の電子書籍が入る。

- キンドルストアでは100万冊の洋書をダウンロード可能。2011年5月には一般書籍の売上を超えた。
- 消費電力を抑えることの出来る電子ペーパーが使用されている。
- PCを使わず書籍や新聞記事をダウンロードできる。
- 内蔵スピーカーやイヤホンでMP3の音声ファイルを再生することが出来る。
- 無線オフ時で約1ヶ月、Wi-Fiオン時で約3週間内蔵バッテリーが駆動する。
- 新聞や雑誌を有料で講読できる(ニューヨーク・タイムズ、タイム等)

Kobo Touch

2012年7月、楽天より発売された電子書籍読書専用端末。

- 価格は、端末にしては破格の7980円。
- 重量は185g
- 画面サイズ11cm×17cm
- 容量は2GB(電子書籍約1000冊分)

- 文字の種類や大きさなどを自由に変更できるため、ユーザーの読みやすいように仕様を変えられる。
- 目に優しく太陽光の下でも読みやすい米EInk社製電子ペーパー「Pearlディスプレイ」を搭載することで、「長時間液晶を見つめていると目に疲れが生じる」等電子端末ならではの問題を解決。
- 無料～1000円するものまで、タイトルの値段は様々。
- 現在、日本語タイトルの電子ブックコンテンツを増強している。12月末までに累計200,000タイトルが目標。
- 対応ファイルフォーマットはEPUB、PDF(楽天koboで販売しているPDF書籍のみサポート対象)

iPad

2010年1月27日Apple社によって発表されたタブレット型コンピューター。

- 本体価格は48,800円(16GB)～81,800円(64GB)
- 重量は約652g
- 画面サイズ9.7インチ
- 容量は16GB～64GB

- アプリケーション内のiBookstoreで購入し利用する。
- 電子書籍の購読アプリiBooksを搭載。
- 電子書籍端末としてのみ使用するのではなくさまざまなアプリケーションと共に、自分に合った使い方ができる。

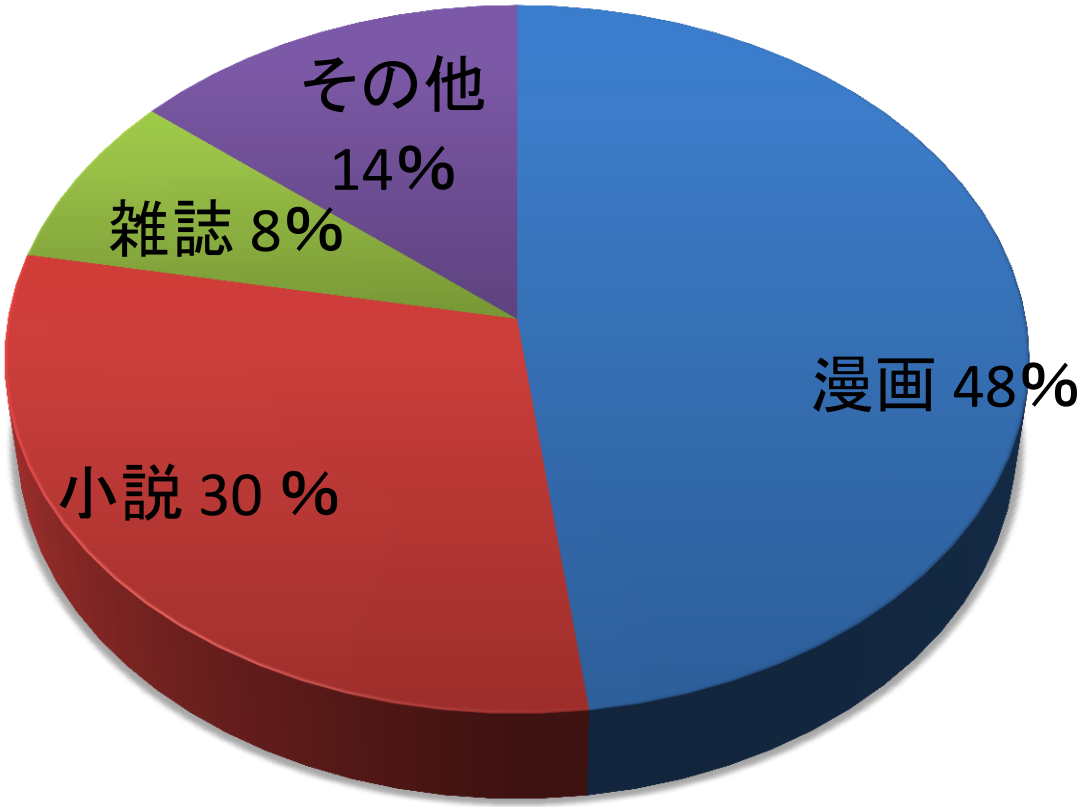
Nexus7

2012年9月25日Google社が発売したAndroidタブレット。

- 価格は8GBが＄199(15,500円)16GBが＄249(19,800円)
- 重量は340g
- 画面サイズは7インチ
- 容量は8GBと16GB
- 対応フォーマットはRSS

- Wifiに接続して利用する。
- Androidのアプリマーケット「Google Play」の電子書籍サービス「Google Play Books」からダウンロード購入。
- 書籍リーダー用途をメインとする一方で動画の視聴、ゲーム、Web閲覧やメールの使用も可能。

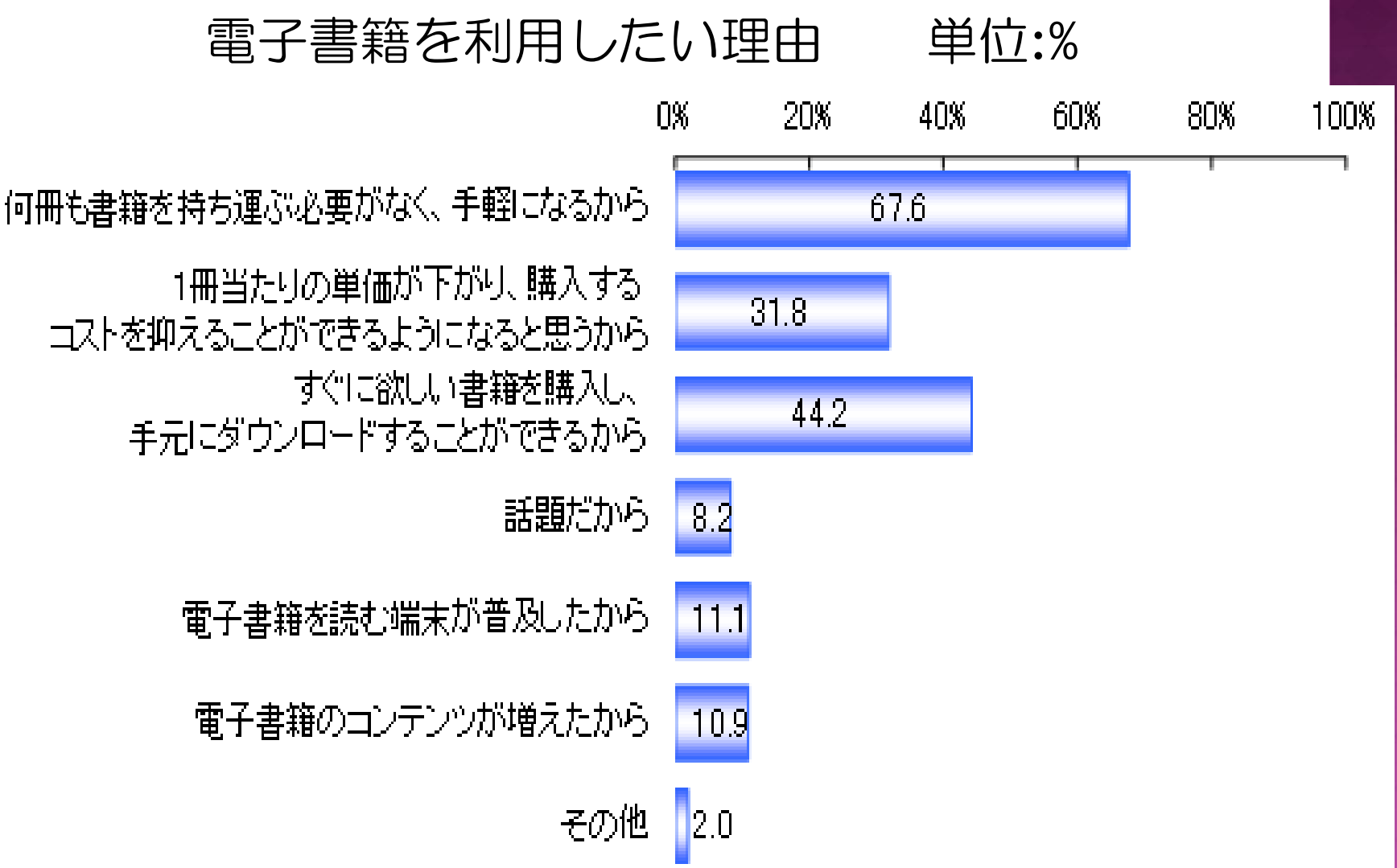
現在売れている電子書籍の割合



電子書籍と聞くと真っ先に浮かぶのは小説であろうが、電子書籍市場で実際に売れているのは漫画であることが読み取れる。

(楽天ストア、紀伊国屋Book Web、eBook Japan、honto、Reader Storeの電子書籍売れ筋ランキング(2012年9月)より集計)

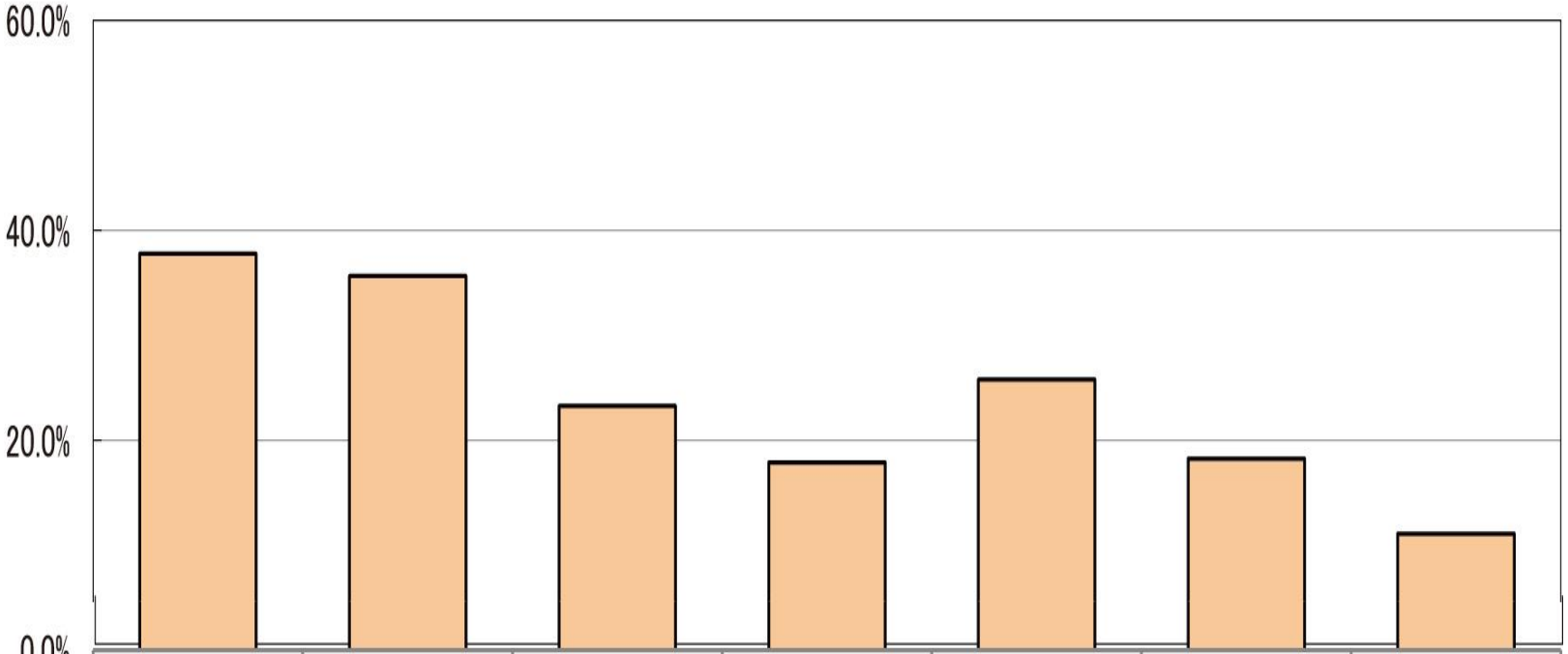
利用者側から見た電子出版



出典:楽天リサーチ株式会社

利用者側から見た電子出版

電子書籍を利用したくない理由　単位:%



	本は紙で読みたいから	電子書籍は目が疲れそうだから	電子機器(携帯電話やパソコンなど)は読みにくいから	スマートフォンを持っていないから	タブレットを持っていないから	値段が高いから(高そうだから)	文字や絵の表示が小さそうだから
全体	37.8%	35.6%	23.3%	17.9%	25.8%	18.2%	11.1%

出典:エムティーアイ株式会社

電子書籍のレンタルサービス

電子貸本Renta!

2007年4月よりサービス開始。クラウド型の電子書籍レンタルサイト。

コミック・小説・実用書・写真集や動画、オーディオブックが閲覧可能。

作品をわざわざダウンロードする必要がなく、ネット上で読むことができる。

レンタル料は48時間105円～で、レンタルした商品は期間のあいだ何度でも閲覧することが出来る。期間が過ぎたら自動的に返却されるので延滞料金の発生等の心配が不要。

PCだけでなくスマートフォン、タブレット端末にも対応。

電子書籍の紙書籍化

株式会社パピレスと電子貸本Renta!で配信されている電子書籍オリジナル作品『わるいこと』が、2012年1月に株式会社メディアファクトリーより紙書籍化して発売。

なお、同作品は電子書店パピレスと電子貸本Renta!で累計5万ダウンロードを超えている。

フォーマットの違い

EPUB→英語表示を中心とするフリーフォーマット。
現在のver.2では日本語に対応していない。
Apple google sony など多くで使われている
“デジュール標準”。

PDF→雑誌や画集など書籍紙面をそのまま表示する
ことに適しているが、A4サイズ画面以外では
閲覧しにくいという弱点がある。

XMDF→kddiなど主要携帯会社の電子書籍にも採用されて
いる日本語対応フォーマット。2006年から登場
しているver.2ではより携帯電話向きに音・振動
という表現もできる。

AZW・TOPAZ→amazon製品のフォーマット.
フィーチャーホン・日本語には対応していない。

☆これら以外にもICT各社にフォーマットがあり、対応語数やデータ表示法について多様化している。
⇒フォーマットが乱立してしまう問題の発生へ